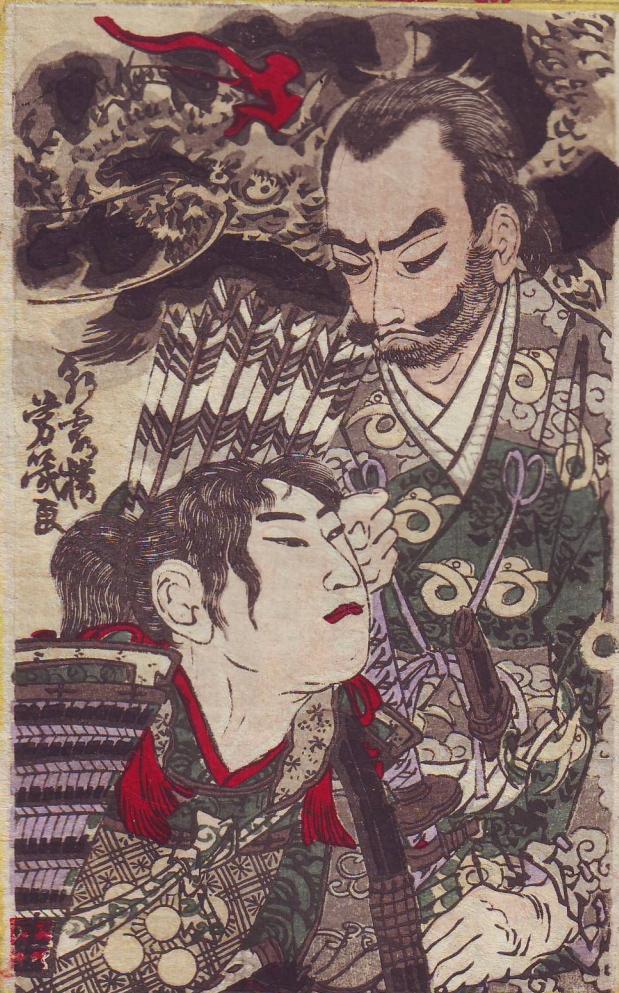


今古實錄  
第参號

眞書太閤記

第廿三



今古實錄 府下及諸縣賣捌所

函館大町

四丁目

常野嘉兵衛  
田中兵太郎  
石版舎

東京人形町通長谷川町角

武田平治

尾州名古屋本町二丁目  
越後長岡裏一の町書林

日本橋通三丁目

丸屋鐵次郎

常陸土浦田宿町  
水戸上市泉町

横山町二丁目

辻岡屋文助

辻岡屋龜吉

馬喰町二丁目

甲府常盤町

通油町

同八日町二丁目

馬喰町二丁目

阿州德島中通町

木挽町一丁目

山城伏見太手筋

人形町通り

加賀國金澤尾張町

芝三島町

伊勢國津京口町書林

同神田雑子町

山中市兵衛

横濱太田町二丁目

具足屋熊次郎

同岡島真七

同嚴々堂

大坂本町四丁目

木村文助

陸前仙臺大町四丁目

東京京橋區三十間堀二丁目一番地

陸前石ノ巻

三陸屋利兵衛

今古實錄印行發兌所

榮泉社

右賣捌所便宜之地にて添注文添愛顧伏て奉  
希上ひ

と工夫しけれ共更ふ宜しき思案もなく櫻より見渡せば寄手の陣中日々新手加えると見え朝毎に立煙も賑しく城中ハ次第ふ竈の數も減じ世に心細く成増れ其儀太夫少しも怖る、色なく籠城の者を勇めつゝ合戦の手配に心を盡しけること健氣なれ寄手の陣中ふへ黒田堀尾小川伊藤一柳の人々寄合て城攻の手立を考へ先陣傍陣の隊伍を正し明る遲しと待ける所へ淺野彌兵衛長政馳來りける故黒田堀尾一同に軍の次第を物語り明日城攻の謀計を告げるふ長政や様各々の御骨折り今に始めぬ事ふてひ但今日御使として罷越しは然様の筋み有む龜山の城も既に落たれば此城に籠る處の兵士皆死を一途ふ思ひ究めし成べし然様の者を攻られんお味方の士卒を多く損耗べし因て城中へ使者を遣へし寄手斯の如く大軍みて取巻たれば城中の者鳥よし外み遅れ出べき者有ベクちず又軍を止て數月を經べ城中の糧も自然と盡る期有べし然らば籠城の者共弓矢の上成で飢渴み身を亡さん事如何ふも口惜くるべし

其上ふ此節桑名長島共ふ難儀最中なり早く城を渡して桑名ふ至り左近ふ力を合すべしと云せ其後一人桑名よりの使者を仕立左近將監自筆の状を渡すべしとなり其計策ハ斯様くどゆ含めしゝば黒田堀尾心得て共通りに成けるふ果して瀧川儀太夫青地頼母僅ふ四五十八人を引具せ其夜城中の兵士を出し其儀太夫頼母僅ふ四五十八人を引具せ其夜城中の兵士を出されバ嶺の城へ忽ち下落去したりけり

(正誤)卷中瀧川一益柴田勝家を諫むるの插畫第五丁へ入べきの處過つて第七丁へ加しハ社員ダ粗漏なり此段深謝し奉つる看客幸ひふ宥恕有ん事を乞

眞書太閤記第八編中卷畢

明治十五年二月九日御届

編輯人不詳

發兌印行所

定價一冊金二十五錢

東京京橋區三十間堀二丁目一番地

東京府平民

出版人

山内文三朗

東京京橋區三十間堀二丁目一番地

方見さよ何様天の許せる大將をくし我々が分際に此人を敵ふ受たるハ手柄と謂つべし然て此儘に止べき成也と持場ノの手配しけるダ儀太夫櫓に立現はれ三た許りの小旗を取て右と左へ振立けれバ不思議や遙ふ聞の聲五六万の人數ふて揚るダ如く聞えしきバ堀尾茂助黒田官兵衛に向ひ儀太夫ダ只今振たる小旗こう怪しけり其上ふ那聞の聲是い豫ての合圖にて後卷の有成め其用意して攻べしと些攻口を引退けるを見て城中よりハ驚破敵ハ引退其處を通せな打拂へやと城門を開て掛しきバ小川伊藤ダ武士共五六十人目前に討れて崩れ立此小旗ハ元より相圖の爲ふも非を儀太夫ダ俄に思ひ付し成バ味方ハ更ふ其意を得走然共足輕共の配りよく弓鉄砲を射出しつれバ敵へ相圖と思ひし處へ龜山落城の聞の聲を峯の後援と誤りて奇手僅に引退しを城中にてい寄手ふて内變出來せし成んど互に思ひ違へしなり宮地左内白子六郎右衛門館長刀の鋒先を揃へて面も振毛走出れバ宮地討すな白子ふ力を

合せよと叫き喚んで切掛る黒田官兵衛是を見て是詞りの者共に退立られし見苦しさ那打取と下知すれば黒田ダ手の二三百人兜の鎧を傾け鎧を膝も取居て一足先引じと突掛る堀尾茂助今ハ能時分ぞ夫掛けと聲懸て宮地白子ダ轍合より切掛る宮地も白子も續く勢へなし軍ハ思ふ程ふ爲たり引入んと思ひしりバ右に突立左に切捲り堅横十文字に打拂ひく城中指て引返しけるを黒田一柳の勢共漏さじと追懸たり宮地白子も手ハ負つ味方ハ多く打れたり接戦く引けるダ宮地ハ難なく木戸を入れるに白子ダ馬門ふ驚きけん堀の際ふて後足を折て伏けるふより六郎右衛門手綱を引綿乘直さんとせし處へ堀尾ダ手の者落びて終ふ爰ふて討れけり城中ふてハ儀太夫一人走り廻り士卒を下知し弓鉄砲を嚴敷射出し防ぐせければ寄手左右なく破ければ儀太夫も殆々持餘し斯てハ始終當城を持堪えん事難儀なるべし如何ふ諭しなば此落心の付し者共を引止ん

門家政討漏してハ殘念なりと一聲叫いて突入バ過たモ大  
塙グ胸板の外より押付の板まで穗先白く突出したりいたで  
なれば何うに以て堪るべき馬より落て死しみけり（藤氏  
系圖）三位中將資盛十四歳の時嘉應二年正月十六日臘下  
に乘合しつる過により伊勢國鈴鹿郡關谷と云處ふ流され  
六年住居したり安元元年御敵を蒙りて上洛し給ひし時當  
歳の男子あり後ふ關谷民部大夫盛國と云いは是なり盛國  
の子實忠左近衛將監より其子關太郎盛忠其子盛勝又左近  
衛將監たり此時始めて龜山の城を築て爰ふ住す盛勝より  
十三代相續して爰ふ住すと云り斯りし後ハ筑前守の勢  
幾許となく籠入んにより龜山へ終ふ落城ふ及ひと注進す

### ○瀧川儀太夫小旗の奇計の事

#### ・嶺落城の事

嶺城と云るハ平資盛十代關四郎盛政に五人の男子あり長  
男盛澄關太郎と云伊勢國神戸ふ住セ次男盛門國府ふ住  
三男盛重龜山ふ住す四男盛宗鹿伏兔に住す五男政實嶺ふ

住し嶺五郎と稱す此政實始めて築きし處なり後々ハ長門  
守といふ尊氏將軍ふ從ひ處々も軍忠ありけるふより鈴鹿  
郡原川崎以下十餘郷を勳功の賞ふや賜ぞり峯グ子孫相續  
して是を領するふ瀧川左近衛將監桑名長島を領し北伊勢  
を所務するにより當城へ瀧川儀太夫詮益を籠置しなり  
儀太夫も然勇士にて弓矢の功者なる事多く人ふ譲らずさる  
バ一益も一方の大將に頼みしなり然共筑前守斯様ふ手早  
く押寄んどハ思ひも依ぬ事なれバ流石儀太夫も大いに周  
章し先足輕を引分塙の狭間を切開き鉄砲嚴しく打出して  
是を防ぐ處ふ寄手の大將黒田官兵衛伊藤掃部助一柳市  
助小川土佐守堀尾茂助六千餘人の勢を以て城の前門を取  
囲み門を作り鉄砲火箭を射掛け一擧ふ揉破らんと尋めけ  
り儀太夫矢倉ふ駆上り四方を見渡す三方三四間に足の小  
城成を五六千人の勢みて取巻ければ鳥ならで遁出べき透  
間もなし儀太夫餘りふ呆れ果脩もく筑前守斯様に手早  
く何時の間ふうに寄たりけん是程の事を心も付で有ける

たり斯りける程に寄手三の丸を乘破り手初よしと喜び勇  
み本丸へ取掛る本丸にてハ三九郎殿并お關大鷦鷯廬宮  
今ハ是迄能せよ蓬ひれな二度死玄たる例なしと大肩脱  
ふ成て働き給へ共敵へ寄ると火を懸燒立く其間より鉄  
砲を打程ふ呼方大いに打惱まざる然れ共關大藏必死ふ成  
て防ぐ程ふ百騎許へ踏止まり火箭を以て敵を射る敵ハ大  
勢なり城内へ狭し透間なく寄たる所へ射たれバ敵も大い  
ふ騒立色めきしクバ大藏真先ふ立て爰を揉や人々と切て  
掛り給ふを寄手の陣より羽田長門守那ハ誰ぞ蝶の指物差  
たるハ關大藏成め能敵成ぞ漏すなど下知しつゝ大勢の中  
へ取籠られ大藏已ふ討るゝと見えし時三九郎殿關を討す  
者共續けと下知せられ二三百許呐と叫て切掛けバ羽田  
も堪え兼少しく浮足ふ成けるを蜂須賀彦右衛門走り來つ  
て羽田を助く羽田大いに力を得死者狂ひふ切て廻れバ關  
も三九郎殿も火水ふ成て戰ひ給ふ寄手の中より無の字の  
指物差仙石權兵衛と名乗三九郎殿ふ切て掛る三九郎殿惡

し下郎め罷り退ど十文字の鎧を以て投笑に突給ふ鎧の光  
りふ乗たる馬の驚きて跳上りしかば無慚や三九郎殿較ふ  
も關安藝守グ手へ切掛け一族の交誼を忘れし無道人弓箭  
汚しと思へ共其處な退乞と突掛るを堀久太郎傍らより關  
を援けて競ひ立鷦鷯を目掛戦へバ鷦鷯心へ猛けれど大勢  
大切立られ遂ふ爰ふて討れけり關大藏是を見て東西南北  
に走り廻り切て落してハ首を取突倒してハ耳を殺ぎ阿脩  
羅王の荒たる如く戰ふ程ふ太刀も打折たり蜂須賀彦右衛  
門遙ふ見付天晴敵や我討取んど走り寄を關大藏立上り桓  
末葉伊勢平氏の正統關大藏なり首の價ハ一國一城ふも替  
つべし寄やくと呼こりく蜂須賀に駆向ふ蜂須賀是を  
打てハ左へ違ひ味方の中へ引入んと歎きけるを大藏早く  
悟りしき巴館を烈しく操出し一足も引走戦ふたり彦右衛

門尉赤松彌三郎等兵糧小荷駄の奉行として五千餘人何時  
の間ふうへ神戸白子の邊迄押來りて陣を取一益此由を聞  
て大いふ驚き昨日迄も鳥居本番場に支へて美濃路に向ふ  
と聞たりし筑前守何時の間に此處迄寄たりけん猿冠者  
ど人の沙汰するふ合ひて賈ふ梢を傳ふダ如く不思議成け  
る武士うな然とて今ハ如何せん但筑前守深々と我領知迄  
押入て陣を取しハ智者の一失と謂つべし龜山嶺の兩城  
へ誰をう援兵ふ向べしと評定しける所へ龜山より雜兵五  
六人落來つてやけるハ筑前守の大勢夜の間ふ人數を城下  
へ押詰在家へ火を掛焼立しバ城中の歴々何も町人共の  
手過ち成ん早打出て消防せよと云儀ふ壯者共我劣らじと  
走り出るを矢庭ふ射殺し打倒し仕つりし間是ハ何者か狼  
藉なりと云處へ大旗小旗打靡クせ多小ハ知走涌ぐ如くに  
寄てし三九郎殿是ハ敵ぞ羽柴筑前守成め早城戸を鎖各々  
持場へ立分れ役所くを放擣ふ爲事勿れと下知し給へバ  
佐治新助關大藏鶴殿齋宮何れも大いふ騒ぎ立斯迄寄るを

知ざりしハ我々ダ油斷なり定めて敵ハ大勢成めと云程も  
なく城下の焼亡次第ふ暮り早四方八面ふ燒移り二丸三丸  
の役所へ火燃付けるふより關大藏諸勢を下知して本丸へ  
引籠り爰ふて暫時防ぐ内ふ夜ハ昧爽と曙漠る雲の透  
ふ敵を見れバ關安藝守真先ふ進み其次ふ無の字の旗ハ仙  
石櫓兵衛釘貫ハ堀久太郎息をも繼モ攻掛りハ程ふ城中以  
ての外に狼狽し弓よ鉄砲よと舞めく所へ万字の旗ニ三十  
流れ押立三四千許もひやらん手毎お投松明を用意して屋  
根軒端の差別なく打込し内ふニ丸ハ早焼落されてしなり  
是ハ蜂須賀彦右衛門正勝なりと沙汰しし其次に同く万字  
の旗を差又十郎家政羽田長門守義質五六千の人數にて大  
手を打破り籠入しハ味方散々お打なされ何れも本丸へ  
聲を揚げ程ふ山林お響て百千の雷鳴くとあやまたれし城  
中にても漸くふ物具し聞を合せしハ其何も不意を討れし  
事にハあり臆病神ふや誘引れけん佐治新助何方へう然失

城ふ瀧川三九郎ダ乳母の夫の佐治新助鶴殿齋宮關大藏ふ  
三千餘人を添て是を守らせ嶺の城ふハ甥の瀧川儀大夫詮  
益を大將として白子六郎右衛門宮地左内青地頼母等を始  
め二千五百餘人を籠置其身ハ桑名ふ在て長鳴へ甥の源八  
郎及び一族なりける瀧川彦次郎を殲し置桑名長鳴兩城を  
一人して持堪へけり然れ共桑名ふハ日置五郎左衛門尉谷  
崎忠右衛門山添九郎太夫小林直八岡部常藏玉井彦輔など  
畢竟の武士七千餘人を加勢ふ籠矢玉薬十分ふ貯へ最嚴重  
ふ楯籠り世の風聞を聞に筑前守三七殿と和平ありて未だ  
月日を過さるふ三七殿再度諸浪人を召抱え給ひ夫等が  
云ふ任せ籠城し給ひ筑前守を引付て是を討滅し三法師殿  
を廢し信孝朝臣右大臣の遺跡たらんと思ひ立瀧川柴田  
に援兵を請給ふ旨筑前守の豫てより入置し間者共ダ往進  
せしクバ筑前守大軍を起して美濃國に攻入舍弟美濃守秀  
長をして岐阜を圍しむる由を聞いて一益密お思けるハ我父  
婿乍ら信孝朝臣血氣の小勇を頗て天と時とを知れ又人を

知れば是自滅の相なり争う天下の御後見たる上將の任とす  
るふ堪可んや嗚呼我ダ思ひし事も半成かして全備ふ至ら  
惜ひべしくと歎息しつゝ定めて勝家も打出る成ん然  
ば筑前守と音野ヶ原又ハ番場の峠などふて軍あるべし然  
んふハ勝家打勝共士卒多く討れて其身も弱るべし勝家若  
負たり共筑前ダ日頃一騎當千と頼みし加藤禪島なセ佐久  
間ヶ輩と相打して多く死傷すべし然ハ兩雄共大いふ疲る  
べし我其弊に乗て一策を施すべし是真ふ十死一生の計な  
りと工夫を凝して居りける所に黒田官兵衛孝高小川土佐  
守伊東掃部助一柳市助堀尾茂助等六千餘人ハ嶺の城へ蜂  
須賀彦右衛門父子堀久太郎秀政仙石權兵衛秀久羽田長門  
守義眞ハ關安藝守盛信を察内者として五千餘人龜山の城  
下へ押寄又ハ安樂越より長岡與一郎忠興中川瀬兵衛清秀  
を先手の大將とし明石與四郎大谷慶松木村小隼人以下三  
千餘人を差添二隊に分れて間道を押せ其次ふ筑前守の同  
勢一万二千人前後七段ふ備へ後陣ハ淺野孫兵衛木下左衛

傷く者數を知らずどり必然共勝家へ世に知れたる荒馬乘の達人成バ之ゆも心を留む却けるダ淺水の橋を渡る時風も吹ざるに勝家ダ馬の前一町許りに差せたる旗竿がツキと折れ川水に浸りしどなり毛叟勝助傍邊より「我君の水の底迄うち靡け」と云しきバ同久左衛門聞も敢半鱗それかいひ浪のいろくぞ」と附けしとなり先陣佐久間玄蕃元盛政元來伊賀守勝豊といふ不和成けるが此程伊賀守病死し長瀬をバ神谷越中守正田左近徳永石見守木下半左衛門等内々筑前守の命を守りて城中を持固めける由を聞惡き奴原の舉動クな只一攻小攻落し神谷正田徳永木下等ダ首切て此年頃の遺恨を晴さんと勇み進んで打たる程お鯖波湯の尾今庄虎杖木の日時を打越て近江國伊香郡中河内椿市ふ若バ雪氷解やらぬ山坡の悪處も更ふ嫌ひなく北の庄長ハ佐久間小押並び柳ヶ瀬の東西五十餘町の間を放火して北國勢の威を示す柳ヶ瀬より木の本に至る餘吾の海邊

を馬手おなして二里半夫より長瀬又馬渡クらくなり姪川曾根川を渡りて三里半都合六里の所成バ注進橋の歯を引ふ似たり長瀬ふてハ斯と聞より思ひ設けし事乍ら筑前守の在ます伊勢の國へ其由渡さを告しか共筑前守へ更ふ驚く色もなく朝夕ふれ其邊の遁世者又ハ山寺の僧などを請じ入れて茶を點じ香を齎ひて久居たりけり（伊勢國貝野の里の八幡宮小羽柴筑前守の陣中の茶屋と云小座敷あり三疊敷の内に爐あり爐の切やうに向切なり勝手の方ふ大目の二疊敷あり水屋と見ゆ釜ハ車軸の小釜なり蘆屋の古作成べし其真偽ハ知ぞと雖も古き事ハ古き物なり）

### （第二十） 筑前守秀吉 豊州表櫛向の事

并龜山落城瀧川勢戰死の事  
瀧川左近將監一益ハ羽柴筑前守と柴田修理進と兩雄相争はト一方ハ傷き一方ハ死すべし其時一益奇兵を發し其傷く者を殺し然して後三七信孝朝臣を以て天下の上將となし其身補任執權の任を握べしと思惟し勢州鈴鹿郡龜山の

近進家清二十餘人其次小加州御幸塚の城主徳山五兵衛秀有九百餘人其次旗本組水野助兵衛國春三百餘人安彦惣五郎秀廿四百餘人其次か越前勝山の城主柴田三左衛門尉勝政六千餘人佐久間久右衛門尉安次舍弟源六郎實政四千五百餘人其次か越前尾山の城主原彦次郎氏次二千五百餘人其次に越中末森の城主不破彦三元治二千餘人其次か拜郷五左衛門久光二千餘人其次か水野新七郎信義四百餘人其次か佐々陸奥守成政總勢一万三千餘人其次か金森五郎八入道四千餘人其次か柴田權六郎勝久三千餘人其次か修理進勝家七千五百餘人近習か毛受勝助家照同久右衛門照景松平甚兵衛則高中村與左衛門武次以下都合六萬餘人近江路指て發向すれば此頃加賀能登の間ふ忍び居たりし浪人其我も一と馳加はるか青木勘兵衛原勘七郎戸島猪兵衛驚見源次郎磯貝九郎作毛屋新内を始として打連く百餘人何れも軍忠を勵みて所領一所の主と成んど勇み勇んで出立たり後陣へ前田又左衛門尉利家五千七百餘人病

中なれば進發の日次も後れ同月十二日府中の城より出陣す又北の庄の留守居ふハ兒鷗若狹守祐全を大將として勝家の從弟なりける柴田彌右衛門勝次溝口半左衛門中村久五衛同文荷齋同一露齋是等を宗徒の者として譜代の武士五千餘人心を一つふして役所くを守りけり一書ふ云柴田勝家越前ふ入部し高百石ふ十人の軍役を充たり其故男四十人計ふ當る又十餘町ふハ米凡五百俵を得べし豆麥の類是ふ准じて知べし依て百石ふ十人を賦せしなり千石に百人万石ふ千人の法と云(又一書ふ勝家北の庄を打立ける時城の大手を過けるふ乗たる馬俄に病起り前脚を折て臥ゑりバ櫛種々ふ勞りしか共終ふ其儘息絶たり是を見人アナ忌々し此度の軍歩々數事有ヒと云合り然るふ勝家是を者共せ坐乗替の馬に打乗出たるダ六七町も行越ける時峯の嵐の嵐し来て松の木の音どうくと響きけるふ驚きて此馬引受け馳出しけるどて見物の老若多く踏れて

戦を遂んと北陸道七ヶ國の中加賀能登越中越前の城主物頭を催促なしければ何れも後れじと北の庄ふ馳集る中とも前田孫四郎利長ハ第一番に到着しけるダ折しも三月三日ふて鄙も都も推醒て嘆き祝ふ時と云殊ふハ小谷の方御入在て後始ての上已成とて酒宴の最中ふ混甲珍しかりける座敷なり勝家世ふも快氣ふ打笑ひ例の事にハシヘ共孫四郎殿の心せ深く喜び入てシ七尾よりハ遙々なり然るふ斯早々着陣在し事最も祝着ふ存ぞるなりとやける時孫四郎進み出路次の雪猶深き所もシより存じ乍ら遲參致しげ利長年若くいへバ未幾許の戦場とも見ぞし修理進殿ハ是迄幾度ク由々敷車ふ出會ひ御手柄も歎知ぞしへバ

まる迄の事ふシ勝家など御年齢の頃ハ然様ふ勵き事へ成ヤさぞシひき末代懸て名譽を傳へ給へ但し先手の事ハシテ今更御邊の所望たり共是を改め難くシ御邊ハ佐久間ダ聊う勝家ダ存ぞる旨のシふより既ふ佐久間玄蕃に諭して左右の脇に稼給ふべしとテ沙汰しければ孫四郎大いお喜び如何にも佐久間殿ふ引副て軍忠を盡しテすべし父ふてシ又左衛門此程持病ふ冒されて褥上にシ然バ今度御出陣の時ハ後でシヘ共物に堪へぬ氣性ふシヘバ聊うにても息りシハシ頼て打立アベキヒトヤフより勝家も豫て父御の病氣の由承まハリ及び隨分療治油斷なく保養致さるベシハシ戦ひ半ど聞給ひ必定出陣たるべくシヒトヤけるふより佐久間玄蕃允盛政五千餘人を引卒して同月七日北の庄を打立けれバ前田孫四郎利長四千餘人佐久間ダ左右に副て出陣す其次ふ柴田修理進勝家の旗本一の備浅井吉兵衛則攻五百餘人二の備宿屋七左衛門兼清五百餘人其次ふ山田宗左衛門尉友澄七百餘人其次に越前本郷の城主安井左

なり昔も然例あり木曾將軍義仲貴女の別れの悲さふ栗津  
の軍ふ身を亡し新田中將義貞の勾當内侍の色ふ惑ひ足羽  
の土と成給人何れも運の盡る所然様の魔縁の出來るや  
其小谷の御方ハ三七殿と諸俱ふ住給ひし伯母甥の親さふ  
勝家三七殿と援るあり然様の事を承まはれバ此度の軍ハ  
必ず柴田打負しへし父君おハ後陣に在て御工夫あれやど  
やければ利家暫時ハ無言ぞ默然として居たりしが利長を  
近付て人もや聞ゆ又云事勿れ我然思ひし事よ將驕りて  
軍危し此程の勝家ハ更ふ昔の勝家成モ小谷の方ハ節と  
云事を知給はぞ義と云事も弁へ給はねバ江州半國の大將  
たる浅井の家の北の御方たりし御身を持って家僕の妻と成  
給ふ程の御本性成バ家國の損益ハ知給ハじ其御心を知給  
へば故殿の世に在ましける時ハ岐阜の片邊み打籠て置給  
ひしなり然様の御方傍らあ在バ利長北の庄ふ行向ひ勝家  
に見參せん時能心して油斷なせうと諫むれバ利長ハ長ま  
り仰の旨趣心得てひ勝家ハ勝家にても佐久間守蕃ダ舉動

こそ誠ふ心懶難くいなれ然れ共是も遠りらず身を果すべ  
き者と存ひ此間北國の諸城主達參會して濃州陣の談議  
お及び時至蕃進みて下けるに各々へ兎もわれ盛政ハ筑  
前と押並べ組で藩など思ふなりと下けるを聞て何れも立  
藩ならで筑前と組有べからず能し給へやど式代してい  
ひひしが利長ダ心に餘り思慮なきナ條と存じハ筑前守  
程の大將ダニ三万の勢を率して出陣したれば膳段々小備  
へつらん何ぞて然様ふ端なく佐久間と押並ぶべけんやは  
も立蕃ダ心を天の満せ給ふ所成べ頗て又天の缺給ハ始  
成べし都て天下ハ筑前と存し父君モハ舊しき傍交りの問  
なり早く御通じて家の安危を謀らせ給へと勧めつゝ  
利長ハ北の庄へぞ赴さける

○前田孫四郎先陣所望の事

天正十一年三月上旬に成て北國雪解路次開けゝるより  
柴田修理進勝家江州表へ出張し羽柴筑前守と有無の一

と思ひしが果して天下泰平の大將たるべく覺ゆること長  
九郎左衛門と俱か語り合始終の安危を思惟しける所へ孫  
四郎利長參着わりしうバ三人閑所ふ寄合て評定ふ及びけ  
る利長今年廿二歳未弱冠と云ど雖も弓矢の道い老武者  
も及び難く進退の機發を得られし所あるを以て故右大臣  
家も湯目止め給ひ壇君との成給ひしなり利長進みてやさ  
れけるに何様父君の仰られし如く勝家の身織田家の宿  
老と云を以て諸將に禮なく身健クふ力強きを自慢して人  
を人ど恩はせ然北國の諸城主を始め少身衆一人とし  
て勝家宜と云者なし只其勢微ふ其力足ざる故ふに從  
ふおてし織田殿御遺跡の事なきふ於てへ別して勝家が誤  
りふてし但し勝家い我養子伊賀守を差置甥の佐久間玄蕃  
ふ家を譲らんと迄せし程の人成バ神戸殿や北畠殿を推賞  
んで右大臣殿の御遺跡と爲と云れしなり又今度三七殿の  
筑前守を討滅さんとし給ふに誠ふ以て崩なき事と思ひれ  
ば勝家誠ふ織田家の宿老なり何ぞ伊勢の北畠殿を以て

主君と仰ぎアベキ神戸殿とても養父の具盛夫婦在す者を  
誰うハ織田の家督と從ひアベキ是程の道理ふるへ暗き柴  
田なれば三七殿の加勢とて寄騎の面々を催促ハしてしな  
り北國ならぬ諸太將物頭誰うハ一人も三七殿に麻キアベ  
キ美濃國の城持さへ總て筑前守ふ一味してひど承まいる  
是ハ筑前守に一味するにていしは毛三法師君の御方ふ參  
るふてし然し此体みて御籠居しハ勝家直に參りて御勞  
の様を見兎角アベキし然べ着到に入給ひて諸城主と共に  
ふ御出陣有べくし利長愚案を廻ししお勝家の運ハ末ふ成  
ひと覺えし其故ハ勝家北國あて處々に戦ひ一度毎己の刻  
に觸て何時も辰の半に出張してひひしきア諸将の心も自  
然後れヒヒと心懸る事みてし然るふ今度美濃陣の催し  
ハ三月上旬と有つるにより二月下旬より用意し御一左右  
を待しに今ふ出馬の沙汰もなし是ハ如何ふと餘り不審の  
晴ぬ儘矣遂出張仕つり下々の者のナを聞バ小谷の御方  
とやらんを迎へ入給ひて夫み別を惜むとて斯延々ふ成し

あり義ありと云つべし信孝朝臣已ふ思慮淺く再度の籠城  
ふ及び乍ら筑前守の大勢ふ氣を奪はれ瀧川左近將監ハ筑  
前守に攻られ且士一揆の蜂起を察じて兵を起し境を越る  
事能ぞ因て岐阜の加勢ハ論に及バすと聞て彌々懲ひ木  
の下ふ雨の漏心地せられ今い越前の柴田ダ許へ往進權の  
歯を挽ぐ如く援兵を出さん事を告げるにより柴田修理進  
勝家大いふ憤怒り先ふへ深雪ふ道を塞ぎれて岐阜の手合  
延引せし故三法師君の舍弟の若君を筑前守お奪れ加之な  
らぞ假ふも家僕同様なる筑前守ふ和議を乞せし事信孝朝  
臣一人の恥辱ふ非ず全く勝家ダ恥なりけり京童の口の惡  
され應クし勝家を云甲斐なしと笑ふらん先討出て再度の  
恥を雪ひべしとて回文を以て幕下の諸将を催促しける柴  
田ハ北陸七ヶ國の管領を賜れ共越後佐渡へ上杉の分國に  
く者なきダ中にも能登七尾の城主前田孫四郎利長ハ回文  
ふ從ひて手勢を卒し柴田ダ許へ駆上らんとて便宜好れば

先越前府中の城ふ入て父の又左衛門尉利家に面會す又左  
衛門尉利家ハ柴田ダ偏執嫉妬深くして君恩を思はず自己  
の意を立ん事を主として忠臣の道ふ疎き事を惡み此程病  
氣と稱して閉籠り天下の時變を考へ居たりけるが果して  
三七殿謀叛して筑前守に攻詰られ漸く其力敵せざるを知  
て恥辱を忘れ和平を請其舌の未だ乾ざるふ再度籠城して  
瀧川柴田の加勢を頼めり彼の筑前守ハ臣なり然れ共諸將  
之ふ從ひ三七殿ハ右大臣家の傍子なり君なり然るふ一人  
も是ふ參り加える人なし其理如何に云ふ筑前守ハ正統  
正嫡の君を奉じ順を以て天下ふ令す三七殿ハ逆を以て  
國を争ひ給ふ順逆との差別斯の如く天に違ひ人ふ違ふ  
我北國ふ居を以て柴田ダ與力たりと雖も何ぞ順と去て逆  
ふ從ひ却て其家を失ふべけんや今暫時世の成行を見物し  
其後出陣する共遙うらじと日夜ふ勢州濃州の軍の摸様を  
聞て其成敗を思惟するに筑前守の軍立總て心も辭も及ば  
れ毛弱冠血氣未定の頃より親くせし木下藤吉郎凡人成忠

躊躇する處へ銃子土器持來り頗て酒宴に及びしるべ打立ん  
とせし軍勢も忙れ果て乍見えぬけり斯る處へ岐阜より星  
城を取圍み攻詰ひ處ふ筑前守二萬八千の勢にて伊勢國へ  
打出瀧川持の城々を攻し程に左近將監力を盡し防戦して  
しひつれ共敵い目に餘る大勢成上兵糧運送の便能味方へ  
折節無勢なるに土地の一揆們時を得て爰彼所に蜂起の色  
を顯すふより瀧川以外難澁の体ふし勿々以て加勢の兵  
を出すふ道なくし早々御出馬有て筑前守と有無の一戰有  
べくいと告しかば勝家嗚呼後れたり我筑前守ふ先立て打  
て出筑前守グ伊勢美濃へ打入んとする處を討ベかりける  
ものを既に斯なるからふハ我軍争う勝事を得可んや但し  
筑前勢州み向ひたり美濃守岐阜ふ在と聞然れば我長瀬よ  
り江西に掛り都へ打入筑前ダ山崎の陣を取切其後安土ふ  
向つて三法師君を取奉つるべし急げやくと下知を傳へ  
其用意をなしけるを佐久間玄蕃允馳來りて盛歎がやせし

所い爰ふてしひしものを叔父君の落着過給ふにより斯後  
手ふ廻り給へり筑前守爲に擒ふせられん事遠くらじ口惜  
やくど怒りしか共詮方なく一刻も早く長瀬迄打出給へ  
やと勧むれど勝家免ふ角小谷の御方の別れを悲しみ出陣  
延引ふ及びける是非もなし

### (第十九) 柴田勝家軍勢催促の事

#### 并前田父子密謀出陣の事

神戸侍従信孝朝臣ハ血氣の勇ふ任せ羽柴筑前守を討滅さ  
ん爲切て上らんど逸られけるを平田國分嶺の三老臣ふ諫  
られ是を思ひ止ると雖も猶其憤怒の氣制し兼遂ふ岐阜ふ  
籠城す抑々岐阜へ故右大臣殿の執し思召ける名城ふして  
中將信忠殿の居城なり然るを爰に楯籠り此城ふ敵を引嬰  
儀を弁へざる人と云べし筑前守ハ此理を思へバ岐阜ふ向  
て長柄川を涉らぞ美濃守をして圍ましむると雖も只遠巻  
ふして矢玉を放たしめを是ぞ筑前守主君の恩を忘れぞ禮

る。城中にてハ誠ふ攻ると思ひ違へ齋藤玄蕃頭鹿伏兎右京亮城戸を開て突て出る。武藏守ハ此際軍もせず少し退屈の處なれべ少も猶豫す駆合せ鋒先より火花を散して戦ふたり城中の武士も寄手も共ふ美濃の勢なれバ互に恥かハし一足も引な引じと揉合しきども寄手ハ大勢なり新手を入替政立しきバ城兵終ふ切負て引色に見えければ岡本五右衛門稻葉新六郎踏止りて鎧を合せ其間ふ齋藤鹿伏兎ハ城中へ入岡本稻葉猪も手稠く敵ひしきバ寄手も容易く打掛らぞ遂に相引ふ引分けられければ岡本稻葉ハ徐々ビ打連てこそ城に入ける城方五十九人討死し手負ひ百五十四人とかや寄手も四十六人ハ討れて百三十餘人ハ手を負ひ双方牛角の軍なれ共城中へ援加する勢もなし寄手ハ日々ふ参加多く手負討死も更ふ目立す是より後の城中にても用心嚴敷大將の下知無きふ討出可らずと隊々ふ之を制ければ寄手も又狠りふ攻掛ぞ只遠巻にして日を送りける處ふ筑前守ハ藝州へ打出瀧川左近將監の持城を攻詰合

戰最中の苗聞えけるふぞ城中以ての外に周章し平田國分峯の三人打寄評定しけるハ眞ふ然様ならば勢州より當城の後援ハ成まじきなり若瀧川切負たらば其威勢ふ乘て筑前守當國へ寄來るベ事必定なり秀長も從つて當城を圍來らバ又二三萬の勢なるべし早く越前へ此由を告知せ藤家の援を引出し秀長を追拂ひなば如何ふ秀吉猛烈し共瀧川を棄て秀長を助くべし其時瀧川柴田前後より揉合營方中ふ居て手痛く戦ひ、筑前守兄弟を討取ん事何の仔細う有べき逆飛脚を越前へ出し遣し勝家ふ此事を告ければ勝能も老耄たり三七信孝の温若嚴何とて軍の進退をなし給ふべき勝家向はで叶まじとて鎧を取て肩ふ投掛上帝籍て馬に乘んど爲ける處へ小谷の御方走り出此へ何處へ向ひ給ふぞ猿冠者と秀吉の事にや暫時待せ給へクし最期の餓別仕つらんと鎧の袖ふ縋り給ふに勝家馬ふも乗兼て躊躇

向をせ給ひて何の詮ういへり真ふ猪武者と世上ふ執囃され給へん事然るべからむ今暫時敵の形勢を御覽じて扱ふ御打出し有べしと諫めけれバ信孝にも秀吉ならぬ秀長と聞て初めの威勢ふも似ず然バ只今打出る事へ思ひ止るべし迎元の櫓へ走上り寄手の様をぞ窺ひ給ふ秀長の旗本ふてハ城中より只今打出る成んど見し所不然も無ハ如何成事やらんと疑ひ陣中を様々に穿議しけるに此一兩日何處の者とも知らぬ水汲夫有けるダ此曉より在處を知定城中より聞者に入し者ならんと推量しつれ共思ひ知ぬ体して居たりければ又陣中へ火繩賣の夫出来りたり秀長此を見て近習に目加して搦め取嚴く責問ども初ハ尾州清洲の町人與作と答へけるダ餘りふ強く責られ苦き儘ん爲に出し立られなりと云ふ然バ此程の水汲夫も汝の同類ふやど間に如何ふも我等ダ同僚にしと答ふ長秀是を呼近付然バ汝を放し返すべし城中ふ返りて汝グ主の刑部

ふ云へ此程打出給ふ成んど見てしに水汲夫ふ歎へられ御出陣延引なし給ふ由にし今又御足輕を火繩賣ふ御仕立て陣中へ御遣しひ因て當陣の様子委曲見せし是を軍師として御打出しベし秀長又城中の次第を探り知る方便を覺ひと洩さむを遣けられバ刑部少輔委曲問尋ねて良久打案じよけるハ城中ふ寄手より入置し者有べし誰にや有ん彼にやと互ふ心を置合程に城中自然ふ陸しから屯成ふけり是只秀長タ一言に因て忽地胡越の思を爲しむ元來なり筑前守は得たる反間の術どへ云もの、怖しかりける謀計なり筑前守は等の始末を聞取重ねて秀長ふ下知しける様筑前守ダ得たる反間の術どへ云もの、怖しかりける謀計存ぞる旨あれバ指圖なきふ城へ向つて矢一筋も射べらる軍勢の内ふ勇氣ふ逸りて城を攻んど云者有べけれ共秀吉す只時を絶ざぞ聞の聲を上げしと確定ふや越けれバ秀長も却て退屈の面を顯しけり爰に森武藏守ハ稻葉山へ向ひ是を守り堅く諸手ふ下知して抜駆を制しけれバ城中ふても却て退屈の面を顯しけり爰に森武藏守ハ稻葉山へ向ひけるダ本陣よりの指圖とて只聞の聲を揚て空砲を放ちけ

を安土に移し參らせやべく存じゆ各々の何と思はれひや  
やと云れしうば何もく道理然るべしと答へける筑前  
守是を聞て然バ打立人々とて羽柴美濃守秀長を大將とし  
三好孫七郎秀次を副將軍とし其勢二万三千餘人美濃路を  
指て出張す大垣の池田岩村の稻葉郡上の遠藤多藝の氏  
家环ハ國境に持要或ハ便宜ふ依て直に岐阜へ向ふべしと  
定めけり又池田ダ増なりける森武藏守長一も同じく美  
濃守の手に付唆々々發向あり然共猶不足にや思はれけ  
ん箇井と山内猪右衛門尉大田垣金右衛門以下七千餘人を  
重ねて濃州へ差向給ひけり

○美濃守秀長岐阜の城を圍む事

并三七殿越前へ援兵を請給ふ事

三七郎信孝朝臣ハ瑞龍寺稻葉山及び岐阜の本城と軍兵を  
一遠藤大隅守氏家常陸介以下七千餘人ハ稻葉山へ向ひ池  
田入道勝入齋父子稻葉入道一徹父子木下將監以下八千餘人

人ハ瑞龍寺へ向ひ羽柴美濃守秀長三好孫七郎秀次山内猪  
右衛門一豊筒金頤慶赤松次郎則之同彌三郎則村以下一萬  
七千餘人ハ岐阜を圍て闕を作る前隊後隊次第を亂さ走騎  
馬武者歩士馬武者順序を正し風雲鳥蛇洲瀬の備整々として  
嚴重か社見えたりけれ信孝朝臣ハ追手の櫓に上り寄手の  
陣を見渡し五色の吹賣小瓢箪の馬印ハ羽柴筑前守グ本陣  
あ相違なし今度ハ城方より切掛り有無の一戦をと血氣か  
任せて逸り給ひけれバ新參の浪人とも何れも興有事と思  
ひくに得物を取て大將の前に立つ已ふ打出んとなし給  
ひける所ヘ稻葉刑部少輔駆來り三七殿の鎧の袖を扣へて  
やけるハ只今打出給ふ事近頃御短慮と覺えし其上お寄打  
の陣を覗ひ見しに本陣ハ五色の吹賣瓢の馬印を立てし昔  
の羽柴筑前守おいへゝ然もあるべし今ハ近衛少將に昇進  
し朝廷の公事を奉行し天下の政務を補佐する身なり輕々  
亥く此邊迄出張覺束なく存付しによりよく探り糺し  
いへバ美濃守長秀ダ秀吉ふ替りて寄しなり長秀ダ陣ふ駈



境川伯耆守國満峰屋出羽守頼隆中川瀬兵衛清秀山岡美作  
 守景隆堀久太郎秀駒筒井陽舜坊法印順慶長岡與一郎忠興  
 羽田長門守義具小川土佐守氏之赤松次郎則之同彌三郎則  
 村伊藤掃部亮桑山修理亮大田垣金右衛門山内猪右衛門一  
 豊木下勘解由左衛門尉同將監泰高小寺官兵衛尉孝高  
 同吉兵衛長政波多野五郎作秀時中井修理進宗善長谷川十  
 左衛門清宗以下宗徒の人々七十餘人郡合其勢三萬五千と  
 ぞ記玄ける筑前守へ着到を披見して夫々面會し豫ける  
 ハ先達て三七殿三法師殿ふ對し野心を挾み居城ふ楯籠ら  
 れし間清洲に在やす中將殿ふ其由訴へひしふ筑前罷向  
 ひ其旨趣を問糺すべし旨仰られしふ付て方々と共ふ濃州  
 へ罷越しハバ御誤りの由堅く仰出されし事面々も確實ふ  
 知給ふべし然るふ未だ一年も過ぎるふ又湯籠城有て諸浪  
 人を召抱へ給ふ事更ふ其意を得也必竟へ柴田瀧川城ダ  
 勸めし事と覺えし三七殿ふも未だ弱年ふ在まし思慮分別  
 ある定まり越之老三法師君の人並に弓矢を取給ふ迄三七殿

勝家又遠慮無き者なれバ一議ふも及ばず領掌し四五日  
の内ふ軍勢を催促し先長濱へ出張すべしと返事えたり  
シクバ信兼大ふ悦び信孝の前ふ出て再度籠城すべき由を  
勧めけり抑々此信兼と云へ明智ダ增の七兵衛信澄の弟な  
リ信澄丹羽五郎左衛門尉ダ爲ふ討れし時三七殿丹羽に  
手を合せ給へバ信兼三七殿を怨める意なきにハ有ねども  
信兼一人にて三七殿を討ん事又容易くらねバ無念乍ら三  
七殿に從ひ有けるグ此騒を時として斯ハ計りしなり筑前  
守ハ和睦を取結ひ三法師殿の弟君を請取て歸京せしき共  
美濃尾張伊勢若狭越前ふ放置たりし間者の員をバ以前よ  
り猶多く入りしクバ件の國々の容子日々に落も無く聞  
えけれど三七殿の結構諸浪人等の風聞信兼ダ計略都て筑  
前守是を知たれど三七殿も勝家も筑前守より間者を入置  
けると知さりける社方見けれ信孝ハ勝家ダ返書の旨懸を  
聞ど其儘兵糧を取入れ矢玉を用意し一向籠城の支度とな  
し城の四方の道々を堀切木の根竹の株を立並べ入馬の足

を妨げんと構へらる修理進勝家の伊賀守ダ逆意を譲め其  
後長濱の仕置を糾し然安土へ出仕し幼君の湯機嫌を伺ひ  
奉つるベ事旨を披露して北庄を出立せんとなしゝ共  
去年の九月迎たりし小谷の方の色ふ迷ひ一日／＼と延引  
亥ける社傾城傾國の古き例と知れけれ長濱の伊賀守ハ養  
父の嫉妬偏執より正統の三法師君を出仕もせず却て是を  
廢し他家と相續し給ひし三七殿を押立織田殿の遺跡とせ  
んと計る事の正理に適はざと云事を辨へぞ筑前守ふ一味  
し柴田の家の永續を謀りけるふ病氣日ふ添て差重り今ハ  
世ふ憑少なふ見えたりし所ふ北庄の修理進此長濱へ來  
る由を聞專胸塞り心抑惱ましくなり二月中旬終ふ身没り  
にき生年廿六歳誠ふ惜しき齡なり筑前守ハ此由を聞取ハ  
修理進必定長濱へ來るならん先走れば人を制し後るれば  
人ふ制せらる柴田ダ出張せざる前ふ再度濃州へ討て出  
三七殿を劫ウし瀧川めふ物思之せバやと近國の大名等を  
回文を以て催しけるふ馳集る者誰々ぞ高山右近大夫長房

屋出羽守遠藤大隅守等の諸將向れも是に服し是ふ從ひ仰ひで補佐の上將軍となし又能朝廷を敬禮し奉つるが故ふ主上の歡慮ふ適ひ大臣卿相是を禮し是を重んせらる次ふ民を安くし商賣の路を開き乱紗狼藉を嚴く諫め沙汰するを以て四方の人民争ふて筑前守の來るを俟是所謂人和ふ非毛して何とか云ん人和すれば天地も違ふ事能はず然るを況や天從ひ地恵まるふ於てをやらば筑前守の向ふ所敵無ダ如し柴田瀧川の靈らい悉皆く是ふ反すと雖も自ら思ひ自ら改むる事能はず却て自ら傷ひ自ら敗る蓋天地

也信孝の漸に抱え給ひし諸浪人共へ興ある事ふ思ひつる籠城も和議と成て何の仕出せし事も無と本意ならず思ふ餘り和議ハ一旦の御計略ふし由既に北國の道も開けてし早く柴田へ御手合をア通達せられ瀧川殿へも御説いて御籠城レへテ筑前守打て出しぞゝ我々御先手を娶取彼猿冠者を只一擧ふ討果し御運を開クせられて天下の將軍と仰ぎ奉つらん事遠からざりと勧し程に元來思慮なき三七殿なれバ血氣ふ逸る餘り然らバ柴田へ使者を遣へすべし瀧川へハ誰社然らめなシ評定有ける所に織田新八郎信兼信孝の書簡を偽て柴田へ和睦ハ暫時の計策なり早く出張有べくシ此方みて初の如く籠城しひこゝ定めて筑前此方へ向つて出陣レベし其時青野原邊にて合戦し退つ返しつ接戦内に柴田勢ハ長濱へ込入夫より安土へ馳入三法師殿を取奉つり勢を引分一手ハ播磨醒ヶ井邊へ押出して筑前守の後を斷其内ふ柴田ハ京へ打上り筑前守ダ私曲を奏聞し給ふべし然バ天下を取ん事月の内を出じと豫けるを

蕃答てや様今度岐阜と筑前守と和平して濃州より京都へ  
引返す由なり然バ筑前守を退掛る爲として五六百人の八馬  
を以て押行ナベし長瀬近く成つ共只筑前守を退掛ると拔  
露せバ長瀬の者ハ決て油斷すべし其油斷を見澄し長瀬ふ  
一宿し不意ふ城中ふ切て入るバ筑前守の加勢も援け來る  
ベウらぞ伊賀守をだふ討取たらば家臣與力ハ元來御手の  
者共なり夫等ダ罪をバ赦され元の如く召使されしべしと  
テ進めしかバ勝家道理くと同心し其儘打立んと爲ける  
に折節山風來て雪烈しく降來り東西も分ぬ儘暫時く  
ど滞留しける中ふ其夜も早晚更ふけり明れバ出陣すべし  
と兵糧遣ひ馬ふ秋飼威勢計りハ猛けれど吾身の丈ふも過  
たる雪なれば勿々に一步も進み難く徒らふ空を睨めて立  
なぐら掌を握りて扣へたり

(第十八) 三七殷勢州勢を催ほし再び籠城の事  
并伊賀守勝豐病死の事

りどハ人々口ふ唱ふれ共是を心に會得せし者甚だ鮮し抑  
々天時どハ何をク云遁甲の八星八卦八門なり九星どハ何  
々ぞ天蓬天芮天衡天輔天禽天心天柱天任天英なり八卦  
どハ坎坤震巽乾兌艮を云八門どハ休死傷杜開驚生景の  
八つを云天正十年十二月の天時を考ふるに筑前守の住す  
る山崎寶寺より濃州岐阜ハ良ふ當る然レバ岐阜より寶寺  
ハ坤ふ當れり坤ハ乙奇の泊する所ふして天芮死門の空位  
なり乙奇ハ天中の主にして群星苟禁都乙奇を避ると云バ  
筑前守自然と天時を得たりと云つべし筑前守濃州も打出  
るふ江州ハ總て筑前守の尊崇し奉つる侯土の御領又ハ無  
二の味方たる蒲生山岡丹羽の領地もして且湖上運送の便  
利を專一ふす濃州に入ても大垣岩村郡上の味方あり是又  
地理ふ應也と云べし筑前守三法師君を奉じて正嫡正統  
の家督を定め亡君尊靈の追福ふ財寶を吝まず爰ふ於て丹  
羽五郎左衛門尉長秀池田勝入齋父子中川瀬兵衛高山右  
近大夫鹽川伯耆守堀久太郎細川兵部大輔入道稻葉一徹峰

天時を察し地理を考へ人和を計るハ兵を用ゆるの大要な

京都へ引廻しけるとなり長濱の柴田伊賀守へ筑前守の誠心を聞安土へ参上し三法師君を尊崇し奉つるべく思ひれ共病中なれば其事もならず服薬し鍼灸し保養に日を送りける所へ越前より脚力を馳て筑前守岐阜を圍み三七難儀か及び給ふ北庄の人數を指南とするふ雪深く路塞りたり夫よりい便宜も善急ぎし出張して筑前守の後陣を取切れど下知せしかども長濱よりの道も伊吹山風し烈しけれバ關の玉川雪に埋もれ勿々容易通ふべくもなし伊賀守病氣以の外なりとて出陣もせざりけるを勝家怪み申賀守へ大病なり共家臣もあり與力もあり夫等を先打立せ三七難儀ふ力を合すべくお遲延せし條何事ぞやと頻ふ疑ひ思ひける所へ佐久間玄蕃允馳來り修理進ふや様豫てより伊賀守ふへ一定謀反とすてしひしを盛攻ケ僞りと渉用ひなくひひしが其証跡確實に露れてし其故に伊賀守ダ妻子眷屬へ云に及ばず近習の者の妻や子まで丸岡ふ置しひしを忍ひくよ長濱へ迎へ取てし其由承まどりしと直

に途中か待受一二召捕てひとて勝家ダ前か引据たり宗徒の者かれはね共丸岡か置べき者を北庄へ無沙汰ふ長濱へ移しし謀反か非忠して何どう思すとやけるふより勝家大に怒り悪き伊賀守ダ振舞クな然バ早々呼寄打て捨んと罵り乍ら縛置たる二三人を片手打ふを打捨たり玄蕃押止然様に手荒き御心哉斯様ふ人ふへ計られ給ふなり能々傍心を静められ謀計を定め然して後ふ少本意を遂らるべし伊賀守筑前守と心を合せ丸岡に置ひ妻子從類を呼取ひ上へ長濱を能取固めひど思はれし然れば急か召呼れし共何とて早々ふ相越テべき定めて修理殿より期々アヒ必呼せ給ふ其迅速に參りテはじくい若又討手を差向け給ひなバ柳ヶ瀬木の下雪吹ふ道の凍いて人馬の往來容易くらざ日を経る中ふ長濱へ筑前守の加勢有べく是毛を吹て疵を求る道理なりとすふより然る上へ玄蕃が異見お任すべし如何ふして伊賀守を亡滅べきやと問ふより玄

和平の本意を詳明ふ諭し各々休息有べしとて領知へ  
歸されけり（大垣御影寺の間）  
堤を築其間々ふ柳を植て  
平常の時ハ洪水を防ぎ事有時の逆茂木に替又ハ時として  
堤の内へ川水を切入るれバ一面の湖水となすべく思慮し  
て築初めし由土人の口碑今ふ存せり（瀧川左近將監一益  
ハ岐阜の沙汰を聞と雖も筑前守の奇兵ふ驚愕され長島監  
外の一揆とも出陣の跡ふ桑名を襲そん事を氣遣ひ且ハ大  
垣の池田に半途を討れん事を危ふみ出陣延引し日々か岐  
阜の摸様を案じ居たりける所へ三七殿より飛脚到来しつ  
れバ何事にやと急ぎ狀箱を披きけるに筑前守と和議整ひ  
筑前守軍兵を退れバ今ハ凶安くいと書れたり一益讀  
終りて眉に難寄せ不思議なる事クな筑前大軍を越し岐阜  
を圍み乍ら何の色節もなく和平して引退し事如何ある  
不審萬一播州杯ふ異變の事や起りけんと思案しつゝ飛脚  
を呼寄せ如何ふ岐阜にて和議をバ何とかしつる聞たる事  
ハ無やと問へバ飛脚の足輕畏まり下郎なれば委しき事ハ

存せ走り但若君の安土へ御入しひしを我々迄も御残り惜  
く存しと豫けるふより一益色を變何若君ハ安土へ御入在  
しと云ク夫ハ眞實ク一定うど云バ飛脚何偽りを豫べき若  
君并ぶ母御料傳保等まで一人も殘らず御越いと豫ける時  
かゆきはだらぬ一益立上り持たる扇を取落し茫然として辭なし稍有て懸  
邊奸智小長し猿冠者め鳴呼口惜や三七殿も我等も遠くら  
ず彼奴アサヒ門ふ膝を屈めん事の口惜るよ如何にせんくと  
涙を流して立たり居たり物狂そしき迄見えたりしとや然  
り逆和平と云バ此儘ふ爲ベクらぞとて郎等二三人使に仕  
立筑前守の旅宿へ遣へし岐阜ホ然様お仰られんふ我等  
式何條異儀をナベキ初の如く懇切おヤ通じしと懇切に  
御すいへと云せけれバ筑前守よりも別儀存せ走り豫ける  
ふより美濃伊勢近江ハ平均に親しき中と見えふけり筑前  
守安士へ參上し三法師君の御機嫌を伺へれ其次に岐阜の  
若君ふ御目見えし附々の人々お對面し前田入道長谷川丹  
後守ふ面會し彌々油斷なく万事お心附しへとヤ沙汰して

すと氣遣ひけるふ今迅速に和平して連枝の君達を迎へ奉

まつる上へ岐阜を攻るふ心易しと心中ふ笑を含み万事ハ

五郎左衛門に任せけり

○羽柴筑前守濃州表陣拂ひの事

并佐久間玄蕃允伊賀守を讒する事

岐阜城中みてハ三七殿始め平田國府峯齋藤稻葉以下打毬

て鹿伏兎右京亮を侍付丹羽五郎左衛門グ返事の旨題を

聞後ハ知ぞ只今籠城の苦と遭れん事の嬉しさに何れも仔

細有まじとやけるふ齋藤玄蕃頭進み出てやけるハ三法師

殿の連枝の君達ハ幼稚ふして未だ櫻桜の中ふ在しませ共

正しく三位中將殿の御二男なり此君を事故なく迎へ奉つ

る事を悦びて筑前守和平の事を承知せしと見えたり然ば

を謀り謀せしと思ふらん然る時ハ此和平遠からぞして破

るべし因て當方にても萬事早々となされて御油斷なく御

計略ひべく存じしとヤせしウバ三七殿にも始て心付給ひ

しが今更違變ふ及ぶべきふもあらねバ約束の通り幼稚の  
君達並小傅保人まで殘りなく五郎左衛門の陣所へ鹿伏兎  
右京亮に付て出し奉つりし程ふ五郎左衛門謙んで迎へ奉  
つり筑前守の陣所へ斯どア通せしクバ筑前守御迎ふ參り  
若君をバ直ふ安土へ入奉つり筑前守も其日御影寺の本陣  
を引拂ひけり（此若君と云ハ後に織田左衛門佐秀則とア  
す從四位下ふ叙し侍従ふ任に給ひしなり入道して宗爾と  
云寛永二年十月廿七日四十五歳おて卒す法名拾松寺英嵩

雄公といふ息女一處あり小笠原因幡守長武の室となり給  
ふ此若君の母ハ近江國多賀社司の女にて此年十八歳無双  
の美人なりけるグ中將殿二條おて戰死の後岐阜の在所に  
忍ひありけるを三七殿迎へどり給ひしなり筑前守此事を  
傳へ聞一目見ぞやと思ひれけるにより和平の題目ふ此若  
君を出し給へどやけるなり若君今年二歳なり一大垣の池  
田勝入齋父子岩村の稻葉入道一徹父子郡上の遠藤大隅守  
を筑前守の本陣お呼迎へ今度速くふ出陣の功を賞し猶又

利たるべくひ然ば何となく筑前と御和睦有べくひどやせ  
しりバ信孝にも此際心中ふ深く恐怖し給ふ處なれば最も  
然るべしとい思はれしなれ共平田國分峯杯さか心中を兼給  
ひ確實なる返事をバ爲給こぞ稻葉刑部少輔重ねてやける  
ハ何様御家僕たる筑前守ふ圍れ給ひ其上あて和睦を請給  
ふと嘸こゑうし御無念ふ思召べけれ共足利尊氏卿も高師直に  
圍まれ給ひし事もい何條御恥辱どアベキド再三理りを盡  
して諫めしりバ信孝にも納得あり何れふも三人の老臣共  
と評定の上とアされるけるふ三人の者も異存なき由を返答  
しければ鹿伏兎右京亮を使として丹羽五郎左衛門の方へ  
和平の事を入られけるふ五郎左衛門能々是を聞糺し口  
状の起きに相違なくバ筑前守ふア談ぞべき由を固く押返  
しけるふ右京亮聊まことに以て異議なき由を答へけるふより五  
郎左衛門筑前守の陣中ふ到り鹿伏兎グヤせし儘を告げる  
ふ筑前守是を聞心中ふ柴田龍川の後援延引せしふより和  
平の事を取結び我ダ人數を引退させ四月の初ふ至り柴田

を引出し無ニの一戦をせん爲と早くも悟りしりバ五郎左  
衛門お向ひ元來三七殿さんしちでん互對し遺恨もなくほへバ御首を給  
くるべくどい懸ても思ひ設けぞ此程憎き筑前討て捨バ  
やとの御結構にし故近々と参向仕つりしのみ三七殿の然  
様か思召替させ給ふに秀吉何とて別儀を存アベキ三法師  
殿并小清洲の中將殿逃も餘儀在まさんどい思ひよりア  
走を何とも三七殿御後悔との御事ふいへい岐阜お御座ます  
三法師殿の傍連枝の公達を安土へ入させ給ふべし然もい  
ハレ秀吉神速お引退さすべくひど答けるを聞て五郎左衛  
門大ふ悦び鹿伏兎右京亮を呼寄筑前守のアせし通りをア  
し、かバ右京亮引返し其旨趣を三七殿ふナケレバ信孝ふ  
も五郎左衛門ハ然様アセ共筑前守勿々一應ふて承知  
爲マジカ者と思えしに思の外早く事なりしりバ三老臣  
と共に大ふ悦ばれ筑前深き慮パウリ有ビ豫てハ聞しげ又  
謀にハ易クりけりと城中一同ふ後の方便を工夫して當座  
はかる

れ瀧川の池田父子ふ支へられ何れも出張延引せり斯て日  
日ふ所々を焼れひだふ幾許の損ひてし上城中の兵氣を疲  
らしひ事味方の爲に此上もなき痛ど存ひ各々の心を以て  
殿ふ秀吉と一先御和陸有て筑前守の軍兵を引上させ其後  
北國の通路開けし頃再度打て出られし様ふ御進め有べく  
ひどヤケレバ齋藤も稻葉も元來然思ひつる事よど一讀  
ふも及バを領掌し信孝の前ふ推參してヤけるハ殿にも定  
めて知し召しべし筑前守の出馬思ひしよりも神速なる上  
人數も豫て積りし三倍ふも及び其上近隣の城持御旗下な  
りける者何れも寄手ふ馳加はりいへば當方へ志操を通じ  
し無二の面々さへ路次を關止られ未だ一人も參加仕づら  
き柴田ハ雪深くして一人立の路さへ自由ならずいへば後  
卷の程何時共定難くい御縁者の瀧川殿ハ筑前守ダ手の者  
萬と云數も知ずひより今ふ一手の出張ふも及ばず筑前  
守日々夜々傍城下の近隣まで押寄來り放火仕つりい今ハ

籠城の者共の家屋敷大方焼失せられひ今五六日を經し中  
ふ傍城下迄も寄來り焼拂ひしつべし然る時の自然と變り  
易く頼み難き人情ふしへバ返り忠の者も出來りこんう  
シハレ一定御大事ふ及びしんと存し因て某等ケ思案仕  
つりしにハ詫つて筑前守に御和陸して寄來りし勢共を引  
退させ其後北國の道開けし時分佐久間柴田佐々の輩らと  
能々渉約束して不意ふ江州へ打て出られ安土を乗取三法  
師殿を傍味方ふ召置せられ却て筑前守を攻られしハレ誰  
クハ三法師殿を捨奉つり筑前守に荷擔仕つりいべき只今  
筑前守の勢ひ強くいも全く筑前守一人の上ふしと三法  
師殿の傍方ふ召れひへばなり昔足利尊氏將軍山門ふ向  
て軍し給ひけるふ幾度となく打負給ひ剩ざへ九州迄も落  
下らせ給ひしげ持明院殿の院宣ふよりて軍を進め給ひけ  
るふ急地に打勝給ひて終ふ天下を一統なし給ひしなり然  
バ如何ふもして江州へ打出安土の城ふ入給ひ三法師殿を  
此方へ御遷しすて其後筑前守と軍をなし給こい必定御勝

發す是信孝ハ謀反人と雖も正しく右大臣殿の御弟なるダ  
故に筑前守是を攻る主となり給ひぞ清洲中將信雄の命を  
以て是ダ三法師君に叛く罪を正す然バ數万の軍兵何れも  
筑前守を推尊んで上將軍となすと既ども秀吉之ふ居事な  
く我ハ三法師君の御手代となり清洲の仰に従ふ者なりと  
云て諸將ふ下られしきバ諸將頗々其德に懷き陣中整々と  
して其旋を守りけるふより稻葉山瑞龍寺山岐阜に招籠る  
所の勢共朝にハ旌旗の出る日ふ輝くを以て重勢の日々ふ  
嵩ひを知り夕にハ篝の數の増に就て今日の參加の新なる  
を計る味方を見れバ今日ハ昨日ふ員減じ次第／＼ふ心も  
細く成つれば夫といなしふ氣も勞れ勢怠み自然退屈氣に  
ぞ見えふけり况や近隣ふ放火有て我方様の家ハ燒れ園の  
聲鉄砲の響きハ長夜の眠を覺す加之らぞ豫てより密に契  
約しつる諸武士衆の早晚心變りして筑前守の手ふ馳加は  
りし由ハ旗馬印ふ顯れ然どもと思ふ柴田ハ雪深くして人  
數を出すに道難く瀧川左近將監ハ三七殿の妻父なり渠名

と岐阜とハ隣國にして其路近けれ共大垣の池田父子ふ丈  
へられ容易く出張し難しとて是さへ延引したり玄うバ岐  
阜の城中益々便りを失ひけるふより國分土佐守嶺信濃守  
环さへ斯てい籠城果敢ド玄うらむ餘りふ兵氣の衰へぬ  
中ふ一方便せぞハ有べからずと思案し本丸の番頭なりけ  
る齋藤玄蕃頭稻葉刑部少輔を呼居てゆけるハ厥の血氣に  
透せ給ふ餘り切り上らせ給ひ筑前守を討果し天下を御心  
の儘になし給そんと仰らる、ふより夫社短慮とすべけれ  
暫時容子を伺ひ給ひ瀧川柴田以下與力一隊の衆を集め其  
上ふて筑前退治有べくいとアセしきバ然バ籠城して筑前  
守を城下ふ引寄瀧川柴田に後巻させ兩方より引抜んで攻  
たらバ筑前如何に猛く其前後の敵ふ困じ果降を乞べきも  
のをと仰られしかバ夫とも成じと諫兼一旦ハ仰の儘に籠  
城していひしに只今斯の如く筑前守に攻詰られ城下の在  
家を焼拂それ纏々約束の諸将すら多くハ敵ふ加はりたれ  
バ瀧川柴田の後卷より外に頼なき所柴田ハ雪ふ路を塞ぐ

事二三尺終ふゝ山も峯も只一面に埋み果し、バ如何に猛  
く逃る共歩路断て往來なし。立蕃怒て百姓輩を驅上路を開  
かせる。終日降雪頻々して三尺作れバ六尺埋まりける  
により横紙破りの立蕃允も呆れ果てひ居たりける（一書  
柴筑前守美濃國ふ到り大軍を以て岐阜を遠巻ふなしける  
より三七信孝氣騰し勢屈し秀吉に就て和平を請し、バ  
秀吉是を許し夫より江州長濱ふ到れバ柴田伊賀守勝豊父  
ふ背ひて秀吉ふ際參す十二月廿三日秀吉安土に到り終に  
播州に歸ると云り（又云く岐阜より江州安土に至る二十  
四里に近く越前北庄ふ至る三十八里）ふ遠くして道阻し  
く大垣へ洲股佐渡の二大河を越て九里ふ近く岩村へ二十  
里ふ遠く勝山の道嶮にして岐阜川深し郡上へハ十二三里  
と雖も路次悲し（又云く筑前守御影寺ふ陣を取り長柄  
川に添て小彈正長屋赤石長瀬の邊に至るまで諸勢を回し  
晝夜を云必處々にて鉄砲を放させ聞を揚し程ふ岐阜の樹

木ふ轡き合てよふ悽然く聞えしクバ城中の老若男女肝を  
消し惜し洲股の砦ふ在て柴田と功を争そひし木下藤吉郎  
其後此稻葉山を攻取しも藤吉郎今又爰ふ來つて我々を若  
むる事の鬱悒さよと云て泣悲しみしとなり）  
(第十七) 柴田瀧川出張延引の事

并三七殿詐つて和平を請る事

岐阜侍従信孝朝臣ハ一旦の怒ふ任せ上洛して筑前守を打  
果さんと軍兵を催促有けるふ平田壹岐守秀胤國分佐渡守  
隆常峯信濃守頼近是を諫めけるふより其事ハ思ひ止まり  
給へとも馳集りける軍勢等の手前面目なしとや思され  
ん然バ籠城して筑前守グ寄來るを待べし逆稻葉山瑞龍寺  
山并ひふ岐阜本城に楯籠る總勢二万許ふ及びつべし羽柴  
筑前守ハ豫て斯有べく謀りつる事なれバ少も騒ぐぞ舒々  
と軍勢を引率し三七殿の味方計りで三法師君を迎取事も  
や有んど思案しつるふよりて浦生丹羽の人々を以て是を  
警固し奉つり次ふ信雄卿ふ訴へ其下知を奉じて濃州へ進

殿の仰せなり岐阜の三七殿謀反し給へり急ぎ若君の涉方へ參上し北畠殿の傍下知ふ付て軍功を屬ひべき由を觸けるにより羽柴美濃守秀長蜂屋出羽守頼隆筒井順慶中村孫平次一政堀久太郎秀政石川備前守貞清仙石權兵衛秀久を始め其勢都合二萬餘人先陣へ醸井泉の那方ふ陣を取り大垣の池田父子岩村の稻葉父子郡上の遠藤何れも打て出筑前守の手ふ馳加へり軍忠を致さん事を専途と寄たりしきば筑前守の勢殆々虎の風を起し龍の雲ふ乗ぐ如く夥多しなんじ詞ふ述難く外陣既ふ長柄川を打渡し近邊を放火しければ岐阜稻葉山瑞龍寺の城々の際皆焼野と成て伏兵を置べま便なし筑前守稻葉一鉄及び右京亮貞通池田勝入齋同紀伊守之助遠藤大隅守をして瑞龍寺山の城ふ向こせ羽柴美濃守秀長丹羽五郎左衛門長秀蜂屋出羽守頼隆ふ稻葉山を圍ませ筑前守總軍を以て岐阜ふ向ひ遠々ふ陣を取て遮ふ寄んどもせ走は三七殿不義の企てありと雖も右大臣家の御弟にして幼君の大叔父君なり情なく是を討

亡さんと宜しき理りとも思へねバ三七殿思ひ返し給へり計らふべき旨ありと云て敵の意を動クし志操を一つにせざる様ふぞなしたりける又播州より山崎實寺夫より京都安土岐阜までの際をバ淺野彌兵衛黒田官兵衛荒木平太夫走り廻りて運送の路を通じ高山右近大夫桑山修理木下將監生駒甚助羽田長門守一柳市助等ハ甲賀蒲生の山々より石津多藝の峯傳ひふ勢州へ切て入べき威勢をなしけるに付て瀧川左近將監是を氣遣ひ容易岐阜の加勢ふ打立んともせ走一益筑前守の大軍岐阜を圍む由を聞て歎息しきも／＼氣の利たる男ゝな一益杯グ及ぶ所ふ非ぞ何事も我等グ思ふよりハ二里も三里も行越し／＼事を計るぞや今この体にてハ三七殿も北畠殿も筑前グ奴となり給ふべしたりける勝家ハ岐阜籠城の事を聞より隼の如き筑前守なり猶豫せバ後悔すべしとて佐久間立蕃允を呼近接先陣となしければ佐久間歡び打立んとしけるふ折しも日々雪降

の期を定め又勢州へ使者を遣はし後援の手筈を極め當臣に立籠り然して筑前守が便宜を得んと云れしかバ三老臣も諒め兼此上へ傍詔ふ從ひアベし迎稻葉山の城ふハ國分佐波守隆常團平九郎正景岡本土佐守貞就を大將として三千餘人瑞龍寺山の砦ふハ織田新八郎信兼是ハ七兵衛信澄の弟なり平田壹岐守秀胤塙信濃守頼近を大將ふして五千餘人岐阜城ふハ齋藤玄蕃頭稻葉兵部大輔鹿伏兎右京亮岡本五郎左衛門桑田彦左衛門繁原彦右衛門以下宗徒の侍士七百餘人其勢一万餘人三七殿の傍旗本より二の丸の門々櫓々を請取塙の上ふハ播磨結門外にハ逆茂木引き筑前守へ豫てより三七殿北畠殿を怒らせ事を起させんやと謀つるふ北畠殿ハ怒り氣もなく阿容くと病に因て延引の由をやされけるふ三七殿ハ筑前守の計りし如く大ふ怒られ上洛して筑前守を打果さんと軍兵を

備ほし給ひしを老臣等が諒めけるふ寄て其事へ思ひ止まり給ひしう共其怒裏角ふ解やらず終に持城に人數を籠道路ふ關を居名謀反の色を顯し給ひしかバ岩村郡上大垣より注進晝夜櫛の歯を挽ぐ如し筑前守是を聞て大ふ驚き急ぎ安土へ出仕し三七殿謀反を企て給ふ由確實ふ承知ぞりてし定めて是へ寄給ふならん其用意有べくい蒲生父子を始め丹羽五郎左衛門尉环ハ悉皆く當城ふ傍入して幼君を守護し奉つるべし筑前美濃路へ出向ひ軍仕つるべしとて直ふ番場の時を打越増田仁右衛門杉原七郎右衛門を使として三七殿謀反を企て、幼君を危ぶめ奉つる事君ふハ傍存知の傍事ふやと清洲に在ます信雄の傍許へ入けるに信雄元來三七殿とハ睦ましからず此次に三七殿を攻倒し岐阜を合せんやと思これしうバ諸國の浪人岐阜へ馳集る事何事にやと心元なく思つるふ三七隠謀の催しゆよりける事と知れたり急ぎ馳向ひ其事未だ强大ふ成ざる中ふ踏瀆すべしと下知し給へバ筑前守より諸將へ北畠中將

御軍体如何ふも雖くし今少し期を俟せ給ひて御計らひ有  
べき由をすけるにより信孝も怒を押へて出陣の沙汰ふ  
及給とねど鎌倉者岡田三郎右衛門杉原鹿右衛門弓の名  
人佐垣九助深谷源太郎羽根左京進など云浪人を多く抱え  
給ひける由筑前守是を聞然も有べしく猶也能々聞糺し  
て注進せよと下知せらる

### ○三七信孝朝臣籠城三臣諫言の事

并筑前守秀吉 濱州表 發向の事

三七信孝朝臣筑前守を討滅さん爲上洛有べしと怒られし  
を三老臣一同ふ諫すけるへ筑前守幼君を補佐し奉つると  
云を以て當屋形へ對し奉つり無禮の條御怒へ御道理ふし  
へ共是を咎め給ひん爲ふ切て上らせ給ふに御恩慮足さる  
に似てひ其故如何ふとす秀吉三法師君を主君と仰ぎ奉  
つゝつれバ上へ朝廷を始め奉つり下へ畿内近江播磨美作  
備前備中の者迄悉皆く秀吉ふ從ひ靡きてしへば當屋形御  
出馬いへゝ忽地ふ朝敵の名を取せ給ひ次ふ御兄君の御遺

跡ふ向て家督を争ひ給ふと云れ給ふべく是第一の損どア  
べく次ふ當國の内ふても大垣の池田父子岩村の稻葉父子  
郡上の遠藤坏ハ當御屋形の催促お従ひゆまじ御出陣し  
損ふし次に當屋形の御勢僅かお美濃半國おして只今御加  
勢ナベキ柴田殿へ雪に阻られ急々の出陣覺束なく瀧川左  
近殿ハ傍縁者お在しませ共永島桑名の門徒共内々怨みナ  
シヘバ容易お浮出張わるまじく是第三の損なり然らば筑  
前守必モ安土を本城として番場醒ダ井邊迄出張有べく  
然もひへゝ平場の合戦心元なくは是彼落合しへば當節涼  
暮年頭の出仕延引せし理り定ク成ねバ討手を指向て其ヲ  
聞きを聞んど云ならん但し家僕ふ等しき筑前守お息状た  
て給そんと餘と云バ口惜し早く越前へ早馬を立勝家出陣

時に聊々も變る事なし其後長谷川前田ふやけるに定めて  
岐阜清洲より年始ふ清洲參向在しならん幾日にて有しやら  
んと問バ前田も長谷川も否然様の事ひひとぞと云然バ歲  
暮ふ御參向しひしかど問ふ夫もひとぞと答ふ筑前守不審  
氣なる面持してやけるは清洲も岐阜も若君の御大叔父な  
り此御城どやひ故殿の執し思召つる所なり常にも御入し  
て故殿の御在世を忍び且へ若君の御成長を喜び給へん事  
眞實の御本性成べきふ歲暮から年始にも御越なきに何事  
ぞとて頻ふ落涙爲給ひけるが其儘使者を仕立て清洲岐阜  
を始め柴田瀧川の面々へ歲暮年始として安土へ早々參上  
有べき由を觸られけるふ清洲の信雄ハ其性質柔弱にして  
決斷なき人なれば此觸を聞いて大ふ驚き折節病ふ依て延引  
しつる由をやされけるふ岐阜の信孝ハ大ふ憤怒り幼君御  
相續の後信雄信孝二人を御後見ふ立るとハ雖も万事筑前  
守一人して取賄ひ柴田瀧川等の老臣へ評定ふも及ばざる  
由なれば某しなば後見の名有て其實ハ無グ如し然バ安土

へも參る事なく京都へも出仕せむ然るを今安土より是の  
如く觸らるハ正敷筑前守所爲と思れたり筑前何者ぞ始  
めと云へば故殿の御草履取り何を我等へ對して斯の如  
く無禮しさ事ふ取行ふぞ更ふ返事ふ及ぶべからずとぞ怒  
られける猶腹を居兼給ひて諸老臣を呼集め筑前守無禮  
を諷め沙汰せぞハ有べうらず早々清洲桑名北の庄へ牒じ  
合せ切て上りつべしと下知せられしお平田壹岐守國分  
佐渡守峯信濃守三人以外の外に仰天し御憤怒ハ然事乍ら然  
様ふ忽々敷軍立て筑前守ふ筑前守向ひひとい筑前守旗本ま  
でも切入事難くしひべし其故如何にとアに當國大垣の池田  
勝入齋父子岩村の稻葉伊豫守入道一鑑齋父子郡上の遠藤  
大隅守何れも無二の筑前守方にひ近江國ふて丹羽五郎左  
衛門勢田の山岡皆筑前守と睦しくしこ方より御出張し先  
を山岡丹羽ふ取切られ後を池田稻葉遠藤ふ追詰られひと  
ば由々敷難儀たるべし其上柴田ハ路次悪くひて四五月頃  
迄ハ出陣なりヤまじくしひ瀧川ハ心中賴母子うちぞ清洲ハ

うら毛討手を差向らるゝならんと覺えし後れて脣を咬共  
何の爲にうしべき一刻も早く筑前守と同心して安土へ御出  
仕しべしと勧めしきバ勝豐も決心し先使者を山崎安土と  
へ立たりけり筑前守ハ勝豐の使者ふ對面し匠作の名代と  
して勝豐安土へ出仕有べしとの儀眞實に道理至極致して  
い早々浮出仕有べくし雪解道開けたらん時匠作も浮出仕  
い由是又畏まり入し浮老駒とテ深く感じ入ひとて使者ふ  
ハ鞍馬小袖黄金を賜どり伊賀守へ來家光の刀お黄金三  
百枚兩家老以下與力の衆へも夫々お太刀脇指黄金白銀長  
持幾棹にう入て送り越しバ伊賀守を始め何れもく不  
思議なる大將哉と云ふ者こそ無りけれ斯て天正十年も暮  
ふ及びけるに筑前守ハ禁中の浮歲暮を勧め三法師君の名  
代たる由を奏聞し自分の浮禮を上攝家宮方清華の歴々  
諸公家の面々何れもく残る所なく回勤し黄金絹布板の  
物綿錢其程々小隨つて是を贈りけるにより斯る亂の世乍  
最樂しき年を迎ふる嬉しさお打寄く羽柴筑前守ハ凡人

ならじと鳴ふ夜をぐ更しける（一書ふ天正十年十二月廿  
三日筑前守安土へ參上し三法師君お歳暮の浮禮をナ長谷  
川前田と相讀して禁裏へ鳥目一萬貫黄金絹綿を獻上すと  
あり）筑前守ハ山崎寶寺を打立て天正十一年正月元日播  
州姫路へ到着し二日にハ家中の禮を受られ其後酒宴を催  
ほし軍忠の者を賞しけるふ都て百六十餘人ぞありける三  
日旗本諸士領分諸寺諸社の禮を受て後家中諸事を沙汰し  
終ると其儘枕を取て臥給ヘバ其息吹百千の雷の如く如何  
ふ驚きせ共起上ぐる事なく四日の夕方漸々目を覺し直す  
供崩ひして山崎へ到り禁中宮方諸公家へ年始の進物を取  
整へ六日未の刻お京着し六條本國寺を假の休所となし七  
日の未明お参内し例の如く關白殿以下夫よへ禮を勤め  
浅野彈正少弼長政を京の所司代となし大津坂下の兩城を  
與へらる長政今年卅八歳なり筑前守八日にハ京を打立て  
津に到り船に乘鳩川より上陸し安土へ參向し九日三法師  
君へ御禮の次第進物の夥多しき事都て右大臣家浮在世の

ふ進退の度を失ひしかバ木下半左衛門徳永岩見守大鐘藤  
八疋田左近等を近接如何すべど相談しけるダ半左衛門  
サ様實をアセバ修理進嚴我身の勇氣を頼みて北越を切崩  
し上杉の所領を合せばやど望まれし事愚ふして云ふ足モ  
大臣家の上洛をも知給はぬハ不用心を諒もし給はぞ禍ひ  
の蕭牆の内ふ起りし事を聞乍ら數日を費して上洛ふモ及  
ばれモ主君の仇を伐ぞ御遺骸を埋葬もせず都て御無念を  
重ね給ふと筑前守云レし所更に透間なし其上ふ近き頃  
三七殿と心を合て小谷の御方を迎取給ふハ何事ぞや右大  
臣家の在します頃ア請給ひて附ふべしと思したらばやさ  
せ給ふべきか請給はぬハ叶えど思ひ知給ふ故成べ  
し然らば右大臣殿の在しますぬを時として氣隨ふ事を行  
ひ給ふ匠作の中と萬事右大臣家の傍爲とのみ取行なひ  
給ふ筑前守と日と同じく云べけんや此方様の傍事ハ長濱  
を預り領し給へり長濱ハ近江の國ふして安土と程近し安

土ハ右大臣家の傍遺跡たる三法師君の傍居城なり三法師  
君と同じ國に住給ひて然も近き境なり親しくなし給ふと  
仕する筑前守なり夫と音信せさせ給ふと何ぞ僻事と誰ク  
ハ云はん是ハ傍與力の山路將監めダ惡ざまふ北の庄へナ  
たるを眞實ぞと頃給ふての御結構と覺えし早く三法師君  
の御前の御首尾を整へ給ひ且筑前守と睦しくなし給ふベ  
くと存し然レハ遠からず作と筑前守と合戰ふ及び  
はん時此方ハ三法師君の御方人として匠作の方へ築前  
守の方へも御援兵有まじく然バ匠作うち負給ふ共柴田ダ  
傍家ハ相違なく相續有ベくは是一旦ハ父子各々別ふなり  
いと不孝の如く聞えしヘ共始終の孝行と存しと憚る所な  
くヤけれバ徳永岩見守聞もあへ必豫て山路ヶ神谷と謂ひ  
つる事もしなり先頃大谷慶松が長濱へ來り我等と五六日  
昔今の物語して酒飲樂しみたるダ娘さふ北の庄へヤツル  
なるべし匠作ハ氣の早くして然も思慮浅き人なり必定遠

と體に知りへり打拂ふて北の庄へ罷越其由アレハリ與力  
と與頭との理りハ立アベキ其証跡もなきに事々しくヤ  
立いとい與力の入らざると覺えシ大谷ダ逗留ハ城主の  
伊賀守殿の心に有ベし我等ダ關係りしと非セと云バ將  
監も打點頭きて立別る、時神谷ダ云様夫ハ初置筑前守と  
修理進殿と始終和平ハ整ふまじ必定明春雪解北國の道  
開けたらん時ふ何れよりう軍を起すならん然共筑前守ハ  
幼稚乍ら主君の御跡を體不定めつれバ筑前に向て軍爲ハ  
三法師君を敵也爲ふて尤も考ふべし修理進殿ハ三七殿を  
取立てと思ふべけれ其神戸の家繼し三七殿なり夫を織  
田家の遺跡に立んと云る、ハ道理以の外ふ違ヘリ此體に  
軍せバ必ず柴田ハ負と成ベし我々ハ修理殿の組と云主  
従ふて無餘所ふ見る共誰かハ惡しと云ベケンや然共正  
しく組頭の柴田殿の家の亡びんと爲を知重顔に見るべき  
ふ非ぞ然共修理殿ハ我々ダ云と聞べき人ふ非ヒ何卒し  
て伊賀殿を筑前守引付て修理殿亡び給ふとも伊賀殿を

世に出して柴田の家の系圖を嗣せしやと思ひぬなり將監  
殿ハ何と思ひ給ふふやと問バ將監如何様筑前守と修理進  
殿と程なく合戰ふ及ぶべし其時我等ハ先手ふ馳加ぞりて  
討死すべく存じし夫より外に思ひ寄れとなくひと答ふれ  
バ夫も然とみしへ共伊賀守殿の此日頃厚く見なし給ふを  
何とて情なくハ成給ふべきと云バ將監我等如き愚人の了  
見にハ父の修理殿亡び給ひて子の伊賀殿の全かるべき道  
理を知モと云バ神谷然バ其事を我等ハ右ふ左思ふより  
大谷共中達之玄と存じしなりと云を聞いて將監ハ彌々何も  
ノ大谷と共ふ筑前守へ内通爲よと推量し只一人北の庄  
へ使を立て長濱を立去んと謀りけり

### (第十六) 柴田伊賀守勝豐羽柴筑前守へ一味の事

#### 并筑前守年始禮の事

大谷慶松ダ反間の計策とハ知走山路將監ダ注進ふより修  
理進勝家善子伊賀守勝豊を疑ひ内々是を除かバやと思ひ  
立ける由を又長濱へ注進する者の有けるより勝豊忽地

し聊々心地能覺えしゝバ再び呼迎へて物語りし夜を更し  
などしける程に北の庄より付置し横目共大いに不審し急  
ぎ雪中を凌ぎ越前へ立越北の庄か到り修理お尋と告れば  
元來思慮淺き膝家なり是ハ伊賀守と筑前守と密々お語ら  
ふとど思ひしかば與力の者の心を引見て其後計らん旨有  
べしと決断し山路將監神谷越中守への彼の參會の列成ねば  
是等と謀し合すべしと近習を密々長瀬お遣へし大谷ダ  
体を癪とせけるふ大谷何となく逗留し夜お入れば木下半  
左衛門徳永石見守大鐘藤八疋田左近と打寄く深更まで  
も酒呑遊びける体只事成すと見えつる耳成せ夜半ばかり  
ふ伊賀守の許へ入て只二人差向ひ蕭々と談合へ極めて餘  
事成すと横目も近習も推量し種々と考ふれバ怪しき事耳  
多かりけるふ因其由都て落なく北の庄へ注進しけるふ因  
山路將監密小神谷ふ語りけるハ大谷慶松長瀬ふ來り滞留  
既に十餘日に及ぶ筑前守の使うと思へば然ふも非ぞ此穩  
しクらぬ世の中ふ長々と遊び居る者や有べき細何ふも不

審み思ひし貴殿へ然い思さぞやと云神谷答て云様某し  
豫て然様も存じつるに因木下半左衛門おナテ早々慶松立  
返りしやう計らひやべしとすてしへば半左衛門がやう  
否苦しからじ大谷ハ我等と内縁あり且慶松母の頼みふ  
因て此瀬にて尺二寸の鮒を得て欲とて来れるなり其鮒だ  
に得させなば直ふ歸るべし但し尺二寸の鮒ハ此雪中ふ未  
難し夫故日數を経しなりと云將監怪しみ猪ハ半左衛門も  
慶松と一味と思ひれたり神谷お策りて大谷を驚かさばや  
と思ひ立先神谷館ふ行て大谷ダと如何にも伊賀守殿の  
お爲に宜しからじと存じいふより半左衛門おナテしへば  
鮒を得んとて逗留の由をアス然ベ大谷館宿としてし家の  
後より鉄砲打掛驚かさんと存じ立ひ一人にて仕つりしべ  
けれ共後日お上より御沙汰のしひし時御心得して給へと  
ゆす神谷聞て如何お將監殿我等ハ伊賀守殿の與力なり主  
従の縁ハいひ之を伊賀守殿の打て出給そん時手を合せしへ  
バ事の濟なり伊賀守殿大谷ふ謀られて筑前守へ一味ビヤ

給ひしれ却て深き心の有し成べし其深き心と云へ此頃の  
雪の深きを便として先此長濱を攻取んど爲給ふ成ん然る  
時へ只今も云し敵と成味方と成どり此とよ其時と成バ斯  
の如く打解談合ん暇も有まじ然バ今宵の酒盛の實に千秋  
心付の通り筑前守の和平を承知しつるハ必定深き心の有  
成んと我々も先考へて御覽  
しへ長濱へ軍兵を差向けしハ修理殿へ雪深き故ふ出  
張有まじくいへ共瀧川及び三七殿餘所に見てハ居給ふま  
ヒ三七殿と瀧川と一ツふ成て援ひ來りしハ筑前如何ふ  
猛くい共長濱をも取得ざる耳成モ柴田殿と敵となり忽ち  
三方ふ敵を設くべし筑前決して然様の思慮なき軍を爲ベ  
から必と云により石見守然れば何故ふ和平を請し成めと  
思案するを見て慶松又すやう今宵ハ亂世を忘れての一  
會なり然様のと云べきふ非ぞ只打解思ひくに樂みて  
ましと云バ大鐘正田も一同ふ然るべし夫ふ付てハ半左衛

門をも呼べきなりと云石見守實に然なりくと云て木下  
を喚迎へたシ半左衛門使と俱に出来り慶松を見て一別以  
來の疎遠を語り又餘念なく杯盡取交し數も重なれバ種々  
思ひを陳て世に睦しく語りける此事如何ふしてウ伊賀守  
の耳に入りけり伊賀守ハ所勞とて病牀ふ在しげ筑前守と  
ハ元來親しき交際あり大谷慶松をも見知りたればあこれ  
病ふ冒され物の六かしきふ餘所の有様を聞たらんふハ少  
し病の怠たる便りもや有ん其大谷呼と云れしかバ使徳永  
ダ家ふ來り伊賀守の云れしやうを告けるふ因り大谷も滋  
くしくと云を以て使立歸り其由をやけるふ伊賀守否然  
に非ぞ此方も病中なり内々ふて對面給そらんと云ふ因慶  
松一人使と俱ふ伊賀守グ病牀に到り何くれと世の有様を  
語り時を移して退出し又石見守半左衛門と額を差寄く

佐々金森何れも上杉勢へ一万三千しか然も勝軍して氣強し味  
方へ一万どひ云路ふ疲れたり御幸塚より七尾まで二十餘  
里を馳て必定勝んと又難しと云て何れも引返しけるを九  
郎左衛門遮りて利家を勧め前田一手の勢を以て七尾に押  
寄一時攻ふ是を攻落す是偏ふ九郎右衛門尉くわが武功ふ因り  
とて利家も厚く是を用ひ給ひければ長ヶ家再度榮へける  
ふ依てハ彼の隠亡浦右衛門くわ子孫も重く取立られ長ヶ家  
老おど成年始にハ隠亡くわ家より枕飯まくらごはんを主の九郎左衛門尉に  
進むるを嘉例よしれいとせりどなん

### ○大谷慶松長瀬へ使節の事

井神谷木下伊賀守いさと諒あむる事

羽柴筑前守くわの柴田と和平の使ひを得しより又一奇計きけいを案  
ヒ出し給ひけり夫へ如何ふと云に北國の道筋なれば長瀬  
を取返さん爲にとて大谷慶松を召出し宣ひけるハ其方豫  
て木下半左衛門くわと無二の懇意なり半左衛門の長瀬の柴  
田伊賀守いさの家老たる耳成みみなり内縁の叔父と聞然バ半左衛門

大得心せバ伊賀守いさへ夫に從ふべし伊賀守武勇ぶゆうの人に勝れ  
し若者成共思慮淺なまし行ゆきて半左衛門尉くわお斯このく云いど  
下知げちし給たまふ間者まわざお馴なじたる大谷恭むねまどりぬと答こたへして  
即時ふ用意し長瀬ながせから來くわり先德永石見守えいせき家いえお案あん内す石見  
守元より慶松けいと云い懇志こんじを通じて談だんふ者ものなり折節せつせつ徳永とく家いえ  
柴田出でが與力大谷鎮藤ちんとうハ正田左近まさださくにんも來會せり此二人慶松けい  
の竹馬たけまの友ともなり不思議ふしきの面會めんかいを悦えび其夜よへ夜よと共に談合だんが  
けり徳永大谷とくふ云い様敵ようと成味方みわと成此頃こころの有様うりょうなり今日  
ハ斯このの如く親おなみ談合だんが共明日あしたへ如何いかふ成行せいこうべきく定め難むずかき  
ハ武士ぶしの身みの上うへなり然ことなりバ今宵いまの實じつに得難むずかき鬱居うきよなり一獻いつ  
酌さけんと云乍はじ家の老おを呼び出し大谷殿おおたにの來くわり給たまふふ鮒ふなを煮いて酒さけを進めばやと思おもふなり其用意よせよと云いバ畏まつまりぬと  
答こたへて立たつわけり徳永とく云いけるハ柴田修理殿しばたりより使者しを以て  
和平の儀ぎを筑前守殿くわへ入いれてしひしに筑前守殿くわ浮うき得心こころ  
の由使者しの衆しゆより承うけたまどりひ四聰よに達たつせし筑前守殿修理殿くわ

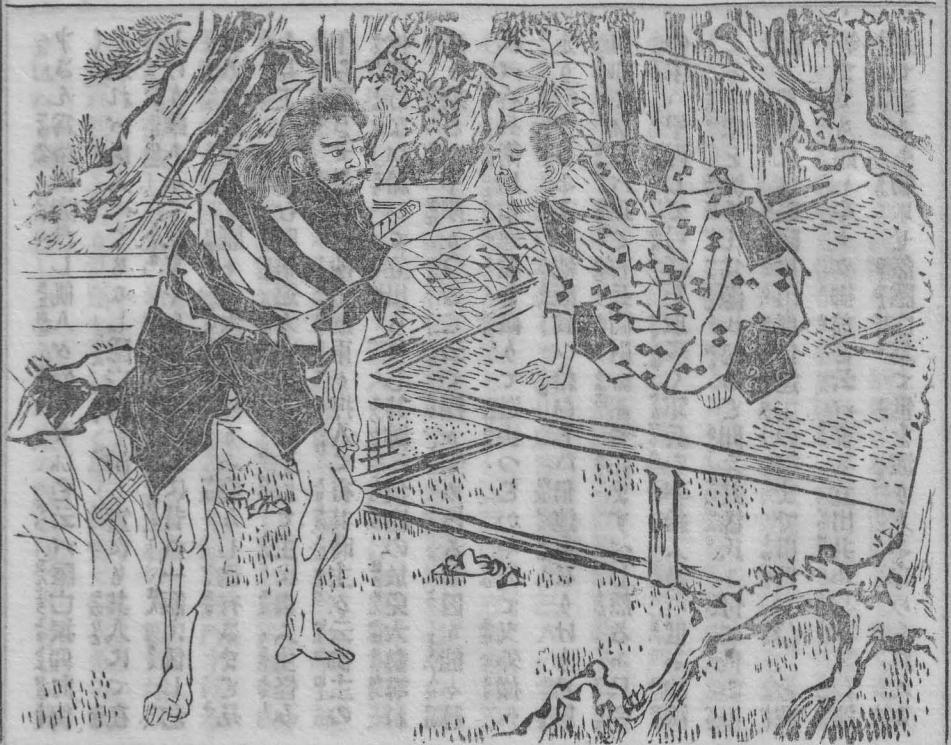
我お従つて武士に成やど云バ浦右衛門大いふ悦び直ふ  
信連に従つて京の軍に高名しけり木曾信連が軍功を賞し  
能登國ふて所領を充行ひしゝバ隱亡も是に従つて家の老  
僕となりつれ共其儘み隱亡浦右衛門と名乗しなり（源平  
盛衰記）平家滅亡の後京都に安堵せぞして伯耆の國へ  
落下り金持の邊に經廻しけるを鎌倉殿聞給ひ當國の守護  
ふ仰せて去文治二年の頃關東へ召下されて剛の者の胤繼  
せんとて由利の小原太夫後家ふ合せて召仕はれけり御恩  
の初ふ鎌倉殿御自筆ふ假名の御下文ふて能登の國大屋の  
庄を珠洲の庄と号す彼の所を賜とりたりとあり珠洲の庄  
とい能登國珠洲の郡にあり一時移り代變り能登國へ畠山  
臣の如く成て長の某と云國に久しく住馴て百姓能躊伏し  
つれば結句守護の畠山より長を篤く歎待けり信連八代の  
孫に長安藤守國連と云へ今九郎左衛門連龍の祖なり  
安藤守の子即ち對馬守なり其頃能登七尾の城主へ畠山修

理大夫義隆と云義隆年若く酒色に溺れ國政正しからず伯  
父の彌五郎義春と俱ふト杉不識菴諱信み従ひける中畠山  
の家老游佐彈正忠溫井衛中守畠山主計頭三人謀叛を企て  
上杉を叛ひ織田家に降りけるが長對馬守を懲憤者ふ思ひ  
合戦ふ及び對馬守ハ討れしなり其後今の九郎左衛門連龍  
職出殿の幕下ふ駆加よりしを前田又左衛門尉の組と成れ  
しなり然るふ義隆病死して畠山の家終に亂れ三人の者共  
七尾の城下在て國中を政事しけるを彌五郎義春無念か思  
ひ上杉を勝の加勢を合せ一万三千の人数を以て七尾の城  
を取掛攻しきバ城へ落て三人の者も討れけり此時前田又  
左衛門尉父子佐々内藏助金森五郎八一万餘の兵を率し加  
勢の爲加賀國能美郡御幸塚まで到着せし所七尾落城の由  
を聞何れも是非ふ及ばざ引返しける時九郎右衛門やける  
ハ七尾落城し三人の者討死していへ共上杉の人数ハ城攻  
み疲れ勝軍ふ矜り油斷していべく早く押寄て短兵急ふ攻  
立いへゝ城を取返しやべきとの案の内ふいとゆせしき共

人に冥へし成共人は是を食もせず夫故前ふ與へヒと云ひ  
しなりと云バ信連飯に何の關てう有らん至尊の湯膳も此  
米なり攝政關白の飯も我々が喰飯も同じ米乍ら食ふ人  
ふ因て米の品まで異なる哀なる世の慙クなど云乍食ひ終れ  
パ主の妻飯を炊き果如法に仕立て信連に勧む信連甚喜乙  
び實に感恩ふて脚氣も癪氣力も健うふ成たり斯てハ我  
故郷へ歸り着んと最安し辱けなし／＼とて立出夫より大  
津に至り志賀辛崎苗鹿堅田和邇小松を過ぎ若狭國より越  
前國を越て能登國下り着暫時世を忍ひ居けるふ木曾義  
仲北國を打從へ都へ切て上り給ム際馳加エリ所々ふて高  
名しけれバ木曾も是を重く用ひしなり木曾ハ山門に取上  
り都を眼下ふ見て手身を爲バ信連ハ山科に向ム此時彼隱  
亡の恩を思ひ出し信連今ハ一方の攻口を承まハリ二千餘  
騎の大將と成しも彼の枕飯みて疲れを養ひし故ぞク然  
バ其恩を報せでモ有ベラら走と云て浦右衛門を尋ねるに  
昔の家にありしきバ信連立人如何ふ隠亡殿過し頃の喜び

やさん爲路に渡れし飢人ダ參りてひと云バ隠亡振仰向詔  
々見れば紛ふべくもなし隠亡膳を消し實にも其人にて在  
しけり誰人ふて在すやらんと思ひしに昔ハ一飯に飢し乞  
食人今ハ正しく歴々の大將軍餘りあ變りし御有さまと見  
上見下し不審む時信連大いなる袋を取て主に與ふ主怪み  
乍ら開きて見れバ沙金幾兩々押入て有其時主ダ云御主の  
枕飯行なひ給ひて立出られし其跡へ使廳の放免大勢尋ね  
來り斯る者や來りつると云て探り求めけるふ因り能々尋  
走り行つるふより枕飯食ひ給ひしハ信連主なりけりと思  
ひ知てし然バ正く右兵衛尉信連歟ふて在ますべし然るふ只今  
の体ハ甲冑して弓箭を取多く軍兵を率給ム是ハ世ふ沙汰  
する平家を滅さん爲源氏起ると聞え其源氏ふ付て世ふ出  
給ふと覺えし鳴豊自出度信連主の斯まで出世し給と我  
等までも嬉しやナウ御前と云バ妻も立出共ふ喜ぶと信連  
見て妻ふ先物取せ然隠亡爲て世を渡り人ふ卑められんよ

て最憔悴たる体如何さま事ふ逢ひし人と覺しく見えける  
ふより深く怪みける顔色を見て信連アけるそ是ハ北國の  
者なるダ宇治川の戰場ふ出逢て持たる者を亂妨され爰や  
彼處も迷ひ歩行脚氣の病差發り誠に難堪し今曉い殊に飢  
疲れて一步も進み兼しき共切て故郷へ一足も近く成て死  
なまじと思ひ是處までも來りつるダ今ハ早實に勞れたり  
願そくハ一飯の恩ふ預り度と云主熟々とは是を聞又信連  
ダ顔を打守り何様惡き事すべシ和郎とも見えずたゞ疲れ  
ふ勞れし体哀れなり然共今ハ與ふべき飯無と云信連四邊  
を見るふ棚ふ高く盛たる飯一臺あり主ふ向ひあれハ如何  
ふど云主われハ和郎ふ與ふべき物成モと答ふ信連神に備  
へし成バ下して賜佛ふ供せしふも非ぞあれハ死したる人に  
奠へし枕の飯なりと云信連扱ハ我をも死したる人と見給  
ひて其枕の飯賜と云て是を取食ふ主の曰く我ハ隠亡の浦  
右衛門と云て死人を焼を驕と爲者なり其飯ハ昨日焼つる



みていざ浴しへど云信連わな嬉し此悦ひかは五十貫も百  
貫も惜からじ先状書て參らせんと云ひ乍放免共ふ硯筆紙  
請ふて信連年ごろ時こへたる瞽眼五十八貫常の所の床の  
下ふ有べし此使ふ付て給ひへと書て判を書き宛所へ長谷  
部右兵衛殿留主處とぞ書たりけり放免共大いに悦び始へ  
五十貫と云しげ今八貫餘計ありと跳りあがり／＼喜びて  
右兵衛殿心のゆく儘ふ湯ひき給へ然どて餘りふ熱し水も  
いと云て水桶をも荷ひ來たり頗て信連湯を取てあぶるよ  
と見えしが然へ無て並び居たる放免共蟻と射懸しうバ養  
泌りし湯にてゝ有叫と云て倒れ伏しあら熱や／＼堪難や  
と云さま五七人へ焼爛れて苦めり信達是を見て嗚呼過ち  
してけりと云乍立上りさま湯桶の端を踏で獄屋の屋根へ  
飛上り夫より塙を越て何處共なく迷失たり獄屋の庭にハ  
放免共六七人焼爛らかされて苦しみ居けるを外の放免共  
良後れて見付たるダ傍らふ信連ダ狀あり彼五十八貫を請  
取ふ行く状なれば放免共又慾心起り彼是と評定して暇取

中ふ信連彌々遠く落清水坂を上り泥濘谷を越し勧修寺ふ  
到り小野大宅に到りし頃氣疲れ腹飢て歩行自由成す暫時  
路傍ふ不休て息繼けるダ信連思ふやう斯ばかり疲れて  
何方へり行べき暫時身を養ひ其後影を隱すべしと思ひ付  
近邊を見れば藪の蔭か草葺る家あり何者にもあれ立てて  
食事を乞ふべしと其家に迫り着案内を乞ひつゝ近傍を見  
廻せバ竹垣四方ふ結ひ廻し草葺の小屋三ツ四ツ立並び薪  
多く積上たり是何者の家なるや

### (第十五) 隠亡浦右衛門由緒の事

#### 并長九郎左衛門尉枕食祝儀の事

長右兵衛尉長谷部信連へ放免共を詐欺て獄屋を遁れ出清  
水坂より泥濘谷を越え勧修寺ふ憩り小野大宅ふ到りける  
に飢勞れ氣力衰へしかバ斯てへ何方へり落行べき免も角  
もして腹を養ひ力を増し然して後ふ又爲ベクリけりと工  
夫し四邊を見れば民の草葺る家なり是究竟ど其家ふ辿り  
着案内を乞けるふ主と思しき男立出信連ダ鬪乱れ警り解

位入道ヨウヂハ宇治ウチかて自殺ジサツし郎等大方戰死ヒツシしつる由なりシナリしからんふ於てオイテ誰タレクハ宮の湯跡ミヤノヨハシを訪ヒび宮の湯子達ミヤノヨハシの後見アフターキンをば爲ハシメべき如何レカかしてこの獄スケレツを逃スルべきと種々スケレツか夫工夫ハラフしける處ヒコロか囚獄スケレツの放免ハグミン共カミンの語ハグるを聞ヒく信連シンレンも近カタき中ミ小切コモリるべき定めヒツメふ入りしとやかな哀れハラハラと云ヒひて涙リイを落スルもあり又ヒツリハ理リりや内大臣殿ウチチキンを飽迄罵ハラハラし奉スルつりたる者ヒトなり相當ヒツリふよそ有ハやと云ヒもあり又老ハラハラたるヒトハ否然様ハラハラに云ヒと勿ハラハラれ總てヒツリハ信連シンレンが道理リなりと飛驛ヒヅキの左衛門殿ソウモンへ云ヒれしなり今朝ヒツリも左衛門殿ソウモンの主シテの家カミふ押ハラハラ入りたる者ヒト有ハん際ヒツリ誰タレクハ防ハラハラぐで有ハべき是ハラハラを防ハラハラぐんとせべ手紙ハラハラ負ハラハラせ又ヒツリ打ハラハラも殺ハラハラしつべし夫ヒトハ僻言ハラハラといふ主人ヒトや有ハべき我ハラハラ々ハラハラもさう振舞ハラハラふべくハラハラ思ハラハラへ共ハラハラ然ハラハラ様ハラハラ成ハラハラべきや如何レカあらんと詢言ハラハラく歸ハラハラられたり然ハラハラれバ死罪ハラハラふハラハラ成ハラハラまじきと云ヒ信連心ハラハラの中ハラハラふ思ハラハラふやう六波羅ハラハラふて宗盛殿ハラハラのあまりふ無禮ハラハラせられしを咎めハラハラたれハ宗盛ハラハラど腹立ハラハラつらん腹立ハラハラづれ巴ハラハラこう斯様ハラハラか獄屋ハラハラに入れたる成ハラハラ然ハラハラれバ宗盛ハラハラへの退從ハラハラか我ハラハラを切ハラハラんと云ヒ者ヒト多ハラハラかるべし此放免ハラハラ

其ハラハラさへ多くハ切ハラハラるべしと云ヒにて知ハラハラれたり切ハラハラられてハ詮方ハラハラなし然ハラハラば放免ハラハラ共ハラハラを欺ハラハラりて見ハラハラ心ハラハラやと思ハラハラひ付夜明ハラハラけれバ一人ハラハラの放免ハラハラを喚ハラハラ止め信連シンレンも遠ハラハラからず切れんと思ハラハラひ定めハラハラし夫ハラハラふ付ハラハラて面々ハラハラへ顛入ハラハラいとあり聞ハラハラてたべと云ヒバ何事ハラハラか早云ハラハラと云ヒ信連シンレン若ハラハラき時ハラハラより清水ハラハラの觀音ハラハラを信じて日毎ハラハラに參詣ハラハラしつるふ此十餘日斯ハラハラる身ハラハラふ成ハラハラてしハバ怠ハラハラりてし因ハラハラて熱湯ハラハラを以ハラハラて身ハラハラを浴ハラハラし最後ハラハラの祈念ハラハラせんハラハラと思ハラハラふなり熱湯ハラハラを一桶ハラハラ給ハラハラ賜ハラハラへ其悅ハラハラひにハ信連シンレンが宿所ハラハラか貯ハラハラへたる鳥目五十貫ハラハラをかりハハベさ面ハラハラ々ハラハラへ參ハラハラらせしんと云ヒ放免ハラハラ共ハラハラ聞ハラハラて音高ハラハラし人ハラハラもや聞ハラハラん先ハラハラ其賜ハラハラはるべき狀書ハラハラて給ハラハラいへ其上ハラハラふて兎ハラハラも角ハラハラも計ハラハラひナベしと云ヒ信連シンレン早ハラハラ方ハラハラ便ハラハラ爲ハラハラ課ハラハラせてけりと心ハラハラふ笑ハラハラを含ハラハラみ其狀書ハラハラんと最安ハラハラくハラハラい但ハラハラし信連シンレンが身ハラハラの禁獄ハラハラせられたり先ハラハラ信連シンレン願ハラハラを協ハラハラへて後ハラハラ狀書ハラハラ共ハラハラ遲ハラハラからじと云ヒ放免ハラハラ共ハラハラ實ハラハラにくハラハラと云ヒひて熱湯ハラハラを持來ハラハラり信連シンレン手ハラハラをさし入ハラハラて試ハラハラみ猶溫ハラハラしと云ヒに因ハラハラり又沸ハラハラして持來ハラハラるを猶溫ハラハラしくと云ヒひて三四度ハラハラお及ハラハラべ放免ハラハラ共ハラハラ此方ハラハラに釜ハラハラを持運び獄ハラハラの前ハラハラにて煮沸ハラハラかし湯玉ハラハラの跳ハラハラる處ハラハラを汲ハラハラ

ふ因て利家の家人とい成しなり其先祖を尋ねれば長馬新  
太夫爲連だいれんダ子左兵衛尉長谷部信連だいれんダ後ごとくや信連高倉の  
宮ふ當參して時々同公しけるダ治承四年五月十五日宮三  
井寺へ落させ給ひける跡へ掩非違使共寄せ來りし際宮へ  
御出ありし由をやけるふ然な云せど只探し奉つれど云て  
込入り乱妨しけるを信連爰にあり僞はりへ云じと云て押  
返しけるを其討取と下知ふ連官人共切て入るを信連一人  
ふて防ぎ戦ひ終ふ生捕れ六波羅ろくぱらお引れしきバ飛驒左衛門  
尉景家に預けられ左の獄に入られたり（源平盛衰記）を考  
ふる五月十四日の夜の署檢非違使源太夫兼綱出羽判官  
光長博士判官兼成高倉宮の御所ふ向ふと有兼綱の三位頼  
職の二男なり光長ハ美濃源氏土岐の一流なり博士判官と  
し御前へも出し人故わさと遠慮して内へ入らぞ光長兼成  
ハ内へ入宮ふ御出有べき由をやつれバ信連立出御留守の

由をやふより下龍共走り入て探し奉つるお兼成ダ下部金  
武と云放免打刀を抜て向ひ合ふと云へり放免の職員令  
物部丁と云し者かて打刀へ即ち帶伏あるものなり此金武  
打刀にてハ協走とて小長刀を以て立向ひ終に信連を生捕  
しなり（一書小國見藤次大上彦内など云者あれ共是ハ僞  
りなり信連の名捕られしハ五月十五日の戌刻ふして其夜  
宮へ三井寺へ入り給ひしむ頼政入道の三井寺へ入りしハ  
十九日宇治合戦ハ廿六日卯刻此日宮へ宇治より今道二里  
半餘のひ給ひ光明山鳥居前ふて薨せらるど東鑑ふ見ゆ夫  
より八月十七日ハ山木夜打平氏の一族兼隆を誅せられ廿  
三日夜寅刻ハ石橋山の合戦十月廿日ハ惟盛富士川の西の  
岸より逃上り十一月二日に歸京せられ十二月二日藏人頭  
重衝東國の追討使として下向せしも路次より歸京せられ  
翌年閏二月四日太政入道薨涉夫より中一年を過し壽永二  
年ハ平家都落なり信連左京の獄に在て傳へ聞バ宮へ流矢

尉然もいへし勝家ハ神戸殿を守立て織田殿の御跡どし自身ハ宿老なり叔母婿なりと云て氣隨を爲んぞ心耳筑前守殿ハ織田殿の御跡残る所なく取賄ひ給ひつれ共眞實の御心ハ是より自身日本の大將と成んと思つるふや早少將み任せられし禁裏の御覺えへ善順て中將ふ進み大將ふ上り給はんと今二三年の程成べし三法師殿生長い頃ハ大臣ふも成給せんが其心中の逞しさとは並々の人々の及ぶ所ふハ非じとナケルア因父左衛門尉も道理なりく秘すべしと相談し是よりして又左衛門尉深く筑前守ふ心を寄てけり（祖父物語ふお市湯料淺井より歸り母と一所ふ岐阜ふ居給ふ天下第一の美人なり羽柴筑前守深く心ふ懸られつれ共夫の敵とて受引給之ぬを三七殿と心をと云れしを丹羽と池田とは是と和したりとあり（北國全太平記）

天正十一年四月廿二日羽柴筑前守秀吉直に越前の府中に押來り前田又左衛門尉と對面し早速和睦し給ひ四

海静謐の功偏に利家を頼入由を宣ひ夫より北の庄ふ押信て城を十重甘重お取圍まる云々とあり

### ○長九郎左衛門尉由緒の事

并長谷部信連牢を破る事

長九郎左衛門尉連龍ヶ由緒を尋ねる也能登の畠山の家臣八人の隨一と呼れし對馬守連繼の二男なり去天正五年畠山の家臣湯井備中守景隆其弟第三宅備後守長盛連意を企て對馬守及び其子九郎左衛門重連を討亡ぼし國郡を押領しつゝのひみよそのこととて九郎左衛門重連の子もんげんらうらばろことくもんつたなつなのりゆうてけり然るふ連繼の二男五恩寺と云寺の弟子となり在けるが父兄の讐を報せん爲還俗して九郎左衛門連龍と名乗りしなり始め連龍信長公に下請て天正八年越中の森山より能登の福水に打て出八代山菱脇佛性寺小竹東番場の數城を陥いれ武威を國中ふ振ひけるが柴田勝家加州退治の爲發向しけるより柴田に加勢して一揆共を打口し終に温井三宅と合戰して其地を攻め取しバ信長公より前田又左衛門尉利家を能州の守護と成し國政を取行へせける

しハ柴田に似ざる心なり又筑前守ハ何事も思慮深くして  
假初の事をさへ再應思按の上成でハ假ゆも容易く決着せ  
ざりし本性成ふ我等ダ詞の盡るも待毛柴田殿の然様か云  
るゝを筑前何と云アベキと忽ちお納得ありしも怪うらぞ  
や是を思ふ柴田ハ雪故和睦して敵の心を油断せんぞ  
心と知らる筑前守ダ夫知らぬ事ハ有まじきに我等ダ云儘  
に請引しを定めて何々深き心成べし然ば即年雪解し時柴  
田と筑前と合戦有んを鏡に懸て明らかなり其時我柴田と  
共にせんう筑前守に屬べき筑前どハ竹馬なり敵となら  
んも願はしきらむ柴田ハ北國筋の旗頭成是を捨んむ武士  
道成す如何にせまじと案ざるを人即ち知て其方お告し成  
ん九郎左衛門尉ダ心云何と云計らひ下せど有けるに  
より九郎左衛門膝を進めて下けるに實に殿の仰の如く雪  
深き故ふ和平して筑前守お油斷爲んと計りしなり但是ハ  
柴田殿一人の意ならず決して瀧川左近將監の計策成ん夫  
を心能請られ筑前守殿ハ必定春正月月下旬より二月初め

頃までお糸州へ出馬有べし然して瀧川を打亡し夫より清  
洲岐阜を討平げ其中に雪踏路次能成ならば越前へ切入給  
ふべし早春筑前守伊勢尾張を攻られんむ柴田殿道塞入り  
て加勢も成まじ是北國の抑えお及ばず第一の時と知べく  
其頃ハ此方様ふても雪深けれバ筑前守殿へも柴田殿へも  
御加勢どして出陣に及びひまじ其上お柴田殿ハ筑前守殿  
と弓箭を取交し給ふみ江州長濱の近所ふてと思はるべけれ  
其筑前守殿伏して長濱最寄にて軍ヲ給ふミ九郎左衛門  
尉ダ心云柴田勢の越なやむ愛機もしくハ柳ヶ瀬邊こそ  
宜しき軍場成バ何れにも柴田勢柳ヶ瀬を越江州に入て戰  
ハベ越前勢必勝の地と思し召すべし筑前守殿柳ヶ瀬を越  
給はレ越前滅亡と知せ給ふべし是を待て御出陣ひ共退か  
らじと覺ぬひと云ヘバ利家大いに悦び如何ふも瀧川左近  
が計策成べし其上お柴田ハ右大臣殿の御妹として淺井へ  
嫁入有しむ市御料人を此頃迎へ貢給ひしとなり是ハ定め  
て瀧川殿と瀧川ダ媒妁成めど思人なりと云バ九郎左衛門

ふ磨きつる上早初老ふも入りついで工夫も喰うし熟練つ  
らん然バ利家など思ひ得し處を筑前知らぬ事非  
然るを念なく快よくや入の儘ふ悦びて腰家へも使に立し  
我々へも物多く贈し心の少い如何にぞや是を思ひ得ねば  
我筑前ダ上に立と難しと曹時頭を傾けて右さま左さまと  
思ひ廻らすお斯有ん共思せれど又寝の床ふ夢覺て心地悪  
きまで思ひ入りてろ居たりしりバ自然と顔ふ現出で利家  
グ近習小性の武士共寄合へ語りけるハ殿ハ山崎みて旗  
頭の柴田殿のやさるゝ通りに調整へて歸りあと登りふ増  
たる引出物多く得給ひ又北の庄よりも馬わ太刀其外種々  
ざりし事成ふ殿は是を喜び給て明ても暮ても物安じ濟ぬ  
御顔の色恐る何事成と云程に表勤めふ側遠き武士衆や  
番頭家の老も聞てけり然共如何にぞ問ひ寄ん縁無れバ袖  
引しらひて黙止けるダ長九郎左衛門尉連龍斯と聞より出  
仕して御前へ出れば利家も扇取直し連龍ふ向ひ如何ふ九

郎ム衛門尉何事なるや呼ばぬに出仕ハ心元無とありし時  
九郎左衛門尉畏まり不時の參上喰うし御不審夫の側成と  
ふし追々言上仕まつるべし恐れあるや條みへ共懲の  
御顔色常に變りて見えさせ給ふ如何成とをり御案じなら  
ん聊う御漏しひいや懲なる田舎意見もほんとやけるふ  
依利家狂笑ひ色に出しと人の間まで過し上京の時はの見  
初たり一人の行衛の覺束なく思ひ暮し心の底ある恥  
しやと宣へバ九郎左衛門尉懸に襄るゝ人心夫も誰故あら  
ち山雪にハ越ん道もなく強面顔ふや思すらん久問ひ慰め  
て頓て年立春にも成て木の日峠の道開く頃を待てとの遊  
ハ盡す例も有と云バ利家莞爾と笑ひ九郎左衛門尉ダ心の  
底能我ダ心と適ひしそや然バ打明語るべし人ふや聞れん  
此方來よと庭の奥なる小座敷小呼び迎へて音を密め其方  
も知如く柴田ハ嫉妬深くして横糾破る心の底誰とても知  
らぬ者なし夫ダ氣折ふ筑前守と和睦の爲我々四人を上せ

氣色も見えざりと云しを聞いて筑前守へ早々勢州へ出馬して瀧川を亡ばべ勝家とい和睦したり天下の先太平に近付たりと云これに因今お始めの筑前守の人謀る先を越給人機發の程を感じけり

(第十四) 前田又左衛門尉の變を考ふる事

并長九郎左衛門尉謀言の事

前田又左衛門尉柴田勝家の爲ふ泉州山崎寶寺ふ使し羽柴筑前守秀吉が對面し勝家の口状を演其贈物を贈りし處秀吉一儀ふ及バぞ承引しつるふ因神速お尋問しけり利家以下三人の面々思ひしよりも早く歸國し各々の居城ふ入て枕を高く眠りけるふ又左衛門尉或夜の寐覺に思ふやう我旗頭たる柴田勝家が嫉妬深く偏執成とぞ我大千代の昔より能是を知る筑前守の大功有て然も人望ふ適ひしを嫉む餘り清洲ふても分外の無禮をなし筑前守を怒らしめ喧嘩の上ふて佐久間玄蕃ふ是を打殺せんと計りしも事成ねば彌々怒りと嫉みと日頃に増つるを以て大徳寺

ふて焼香の論に及びしむ筑前守へ嚴重ふ備へを立三法師君の湯意と云て是を戒めしりバ返す詞も無りしり共諸大將列座の中に其罪を擧られしハ如何程う腹の立けん然バこそ都の内ふて鬪諍ふ及公可りしりとも人數少なけれバ詮方なく鞍馬越して越前へ歸りし成然程遺恨ある筑前守へ和平を請しと返すべくも不思議の事なれ定めて思慮あると成めど幾度となく考ふるには必定北國へ雪深く十月より二三月までハ人馬の往來容易くらむ然るに因櫛ふ和睦を取結び筑前守からぬ油斷爲其内に軍馬を調へ打て出べき心成ん是しきのと我等かてだふ思ひ得しに筑前守が容易承引せしころ怪しけれ然ハ筑前守勝家が胸中を悉皆く知りて勝家が謀略ぶ付て又別ふ工夫を凝せし成め筑前守ハ我少年の時より世ふ親しく交りしむ假初の事みて夫ハ未だ弱年の思慮も分別も定まらぬ時の事をくし今ハ中國の探題職多くの敵ふ出合て智慧も了簡も日々ふ新た

しが初はじハ忍しのひかが注の進すすせしと覺おえたり然なも有あんあり北きたの庄いへ瀧川たきがわヶ使つかひを立たてしも定さだめて筑前ちくぜん知したるならん一ひとを知しバ十じゅうを知しる凡人ぼんじん成なぬ筑前ちくぜん守もり末代まつだいお又またとあるまじき弓箭ゆみやぐさ取とかな然なに思おもひるぞやど云いバ金森入道きんしんにゆうどう詞ことばを繼つづ何なれにしても武運ぶうんふ適あひし大將だいじょうなり一定天下じとうじやを切鎮きりぢんめ太平たいへいに致いたされんと遠とほからじと覺おもえしと首くびを傾かたむけて語はなるを聞き伊賀いが守もり胸むねに急來きそくる息いきを休やすめ某それがし大おき豫よて然なやうに思おもひしと山崎やまざきの様子ようすを知しばやと人ひとを遣おとしてしむ一人ひとりも歸かへり參さんらぬふ因能いのう々是いはを尋たずねれば伏見ふしみの里さとの六地藏ろくじぞうに取とれてしとや世よふも不思議ふしきのとふいと語はなり終おれバ驛馬驛馬よし率ささせ給たまへと催さいふされ四よ人の使節しじゆくハ立たつ歸かへる勝家斯きやうかと聞きよりも謀めぐり得とりと喜よびれ巴ひ四よ人の衆しゆを種たね々と饗うむ應うむしつゝ太刀馬たてまの數かずを尽つくして引ひけ告こ遣しけるふ左近さこん將監眉まつげを顰しかむめ然様あらぎやうふ手早てはやく秀吉ひでよし承うけ知しせしこそ怪あやしけれ初はじハ此方このへの謀計ぼうけいに付筑前つけちくぜん却かりて謀めぐと見みえたり怖おそしく油斷成なじと一益ひとえの豫よて甲賀こうかの忍しのの術じゆ習ならひ覺おもえ

えし者成なば我腹心わがふくしんの郎等らうどうを山崎指さして出し遣おとし是これも歸かへらん日ひを過すぎし更さらふ一人ひとりも歸かへらねば再度ふたたび人ひとを出し立容子たてゆめこを聞きバ伏ふ見みなる地藏じぞう化かて人ひとを取とる旅たびの者ひととし見る時とき若わかき女めの姿すがたを變かへ袖そでを整そなへて枕まくらを交かわす程ほど成族せいぞく人ひとが生うて歸かへる稀まれ成なば此頃このまろ世上じやうじやうふ取と傳つたへ化か地藏じぞうと沙汰さたする怪あやきことの限かぎりなり山崎やまざきみてハ淺野蜂須賀あさの黒田木村くろだの老臣ろうしん共筑前ちくぜん守もりの前まへ出いで四よ人の使節しじゆくのヤ條やじゅう只ただ一應いつようの御評定ごひょうもなく神速しんそく承うけ知し有あい如何いかなる浮恩慮うきおんりょのいひしやらん憚のぞり多おほきと乍さなら我等われらが心こころふ合點あてんせられ走はし因いんて伺うながひ奉たまつると言葉ごんば等ひくやければ筑前ちくぜん守もりの眼まなこもあやに打笑うちわらひ初はじもく人の智慧ちゑい相應あひに世よに勝まされ給たまへ然なるに然様あらぎやうの事ことを言いるい如何いかの海うみの淺あささ深ふかさ程量ふかり難むずかきものもの無なりけり面おもて々おもて弓矢ゆみやぐさ取とる事ことうやと云いれしふ因いん淺野黒田くろだの二人ふたり暫時じゆじ俯向ふくむけ思案おもんべしけるが莞爾わらわらと笑わらふて如何いかふも然様あらぎやうの淺あさ々あさしき浮恩うきおん事ことふい歎くいんと聊ひらう得とく心こころせし体成たいせいしタバ筑前ちくぜん守もり何なと云いぞ淺あさ々あさしとと問たずけるふ因いん淺野彌兵衛みやわ隆子りゆうこを開ひらき今年こと暖ぬくにして夫め爰あ許ゆに

ふ和平なんぞ、アベキ筋になく、幾重とも勝家の助言に因、万事を執行ひやべく。若君の事へ元よりの事あり、爲ふ成ぬ事へ勝家までもなし。面々の渉意見にも預りや度し所詮若君早く渉生長して、我々を故殿の如く渉引廻し有やう。ふ成參らせ度に依ての寸志ふし、何辯傍叢同志おて争かひを起しやべけんや宜しく此旨を以てや給へと云へバ利家以下四人の者共一同お筑前守へ穩しき心證斯てへ我々の使立し功も立りと覺びて即ち勝家ダ贈りし品々を披露しければ秀吉大ふ悦び柴田殿へ昔より斯の如き心の方ふて、ひしなり腹立れし時へ鬼の如く腹の平なる時へ佛なりと人も疇し、我も知る實なりけり。使ふ立れし面々も寛ど坐ませ一歎參らせんと云より早く盃盞を出し看數々引出て四人を聳懼又種々の引出物すれば四人の大いふ悦び斯の如く筑前守殿の打解給ふ上へ勝家も嘸かし悦喜しそんぞらん。但國郡を隔て、遠路参りし印かし一筆書て御摺を給ひりやべくやと利家懇切ふす出れば筑前守心

解ねば幾枚の誓紙を參らせたり。其是を破る隙かけに又入質を取換しても之を棄れバ詮もなし。元より不平と思ふ秀吉ダ今改めて和睦せんと云へ。今まで不平を抱きし似たり和平せんと發言有し。勝家さへ贈り給をぬ誓紙なり。秀吉抽んで贈るべきに非毛と云て播磨の國産節磨の褐布千端明月の酒二十樽を勝家へ贈り。前田金森原不破へハ夫々に音信し長途の旅行を慰めけり。斯て四人の者ハ始めの如く大津より舟に乗十七里餘を僅ふ三時をかり。長濱へ着伊賀守に面會しければ伊賀守筑前守ハ何と云つるぞと問ふ。前田金森不破原口を捕えて斯こそ云つれ免ある。云つれと云へバ、勝豐眉を顰め筑前守め早北の庄の意の中を知つると覺し。夫こそ例の忍び共の知せし所なれや。四人の方々夫とハ知らせ給て。史實に筑前守ダ打解しと思ひ給ひしとの淺々しさと云れて何れも肝を消し。前田又左衛門尉人々が向ひ何様怪しと思ひつるハ我々山崎へ着ざる前ふ夫々と旅宿を點じて有つるをばめで不思議と疑ひ

木を引て筑前守移徒ありける處へ柴田勝家の使として前田又左衛門金森入道不破彦三原喜次郎四人入來せしよし富田左近將監より出しうべ筑前守呵々と打笑ひなふ柴田より使節どよな是へ請ひやせとて何氣なき体あて對面に及ぞれける前田又左衛門ハ豫てより筑前守と入魂なれば久しう逢ねども懇意の中なり書院へ通り時節の挨拶と終り金森入道不破原ダ口龍終るを待付て利家膝を進ゆけるハ故殿傍事ありし後諸將心々に引分れ區々ふ耳成行んとす夫と云ひ筑前殿ハ中國の探題職ふて播磨ふ在國在ます柴田ハ北陸道七ヶ國の管領として越前國ふあれば其際數十里を隔つ是自然流言も行なはれ不思議の事をす族も出來を其勝家能々思案するに筑前守殿の心中故殿の傍志操を續せ給ふと主とし給へば枝葉の言を以て是を疑ひすべき非ず勝家今ハ老たり故殿の仰を承し北陸道を如何にして切り平げんべし其餘のとお於て筑前殿と相撲べきこと難し此上の若君の傍とい勿論万事ハ筑前

守殿も勝家を今までいふせく思召づらん成共總て和平の儀を主として昔の如く水魚の思ひを成給ふやうお頼み奉る旨を落なくアセど勝家厚く懇切ふやでし我々四人ダ心ある勝家更ふ詐僞てアふ非じと存じし筑前守殿元來勝家と遺恨有べきやうなく勝家ダ氣質へ知らせ給ふ如く骨なき田舎人の我儘者なり一旦ハ筑前殿の大功を嫉し惡しなきひつれバ清洲ふても無禮を顯しげなり然れども思ひ返し過でりとやに因て我等を呼迎へ一向お頼み入てひと勿々以て謀計むへひじとア因筑前守殿は思ひも寄ねとを承知るものうな秀吉勝家の推舉ふ因故殿に新參し勝家の武者体を眞似て度々戰場ふて首尾を合せしかバ物主ふ成れし時ふ勝家の一字を歴て羽柴と名乗しなり何どて勝家ふ對し疎意有べきや然るふ只今和平の儀をア越給ふと近頃迷惑の至と存し然し乍ら夫ハ秀吉ダ身に取て分ふ過たる眉目ふ使とア勝家の口狀どア秀吉ダ身に取て分ふ過たる眉目ふ秀吉不和の意を存せざる事ハ年來久しき事ふて今新た

結ばんと存立しが前田殿へ筑前と舊好あり金森殿も久しき御馴染なり不破原の傍二人の勝家無二の方々なり勝家が心腹を能々筑前ふ傍通し下されいへと云ひしきバ利家も金森も是儀一段の傍事にい早々上洛仕まつらんと答へしかバ勝家大ふ悦び和平の印とて越前綿千把壇鮎絶漬二桶を筑前守へ贈るべしとて四人に渡す四人是を請取て十月廿八日北の庄を進發し江州長濱ふ至り柴田伊賀守グ許ふす寄勝家と筑前守と和平の使として寒天に旅行するよしを告しむ勝豊折節所勞して枕重く臥乍ら此事を聞四人ふ對面給はるべけれ其病中なれば免し給へ但し親ふてひ勝家なき然様ふ耄つらん梢を傳ふ猿より猶逸早さ筑前なり爰許ふさへ筑前守召使ム忍ひの者五人七人へ常にあり北の庄ふ何う忍ひを安置ざらん淺くも思ひし我親やどきしと恐ろしく扱へ我等グ此度の參向も筑前定めて知つらん成共今い如何ふ爲と長濱より舟ふ乘湖水ふ棹差大

津ふ上り關の清水を手ふ掬ひ蓬坂山へ走越て柳の綠花へ紅る都の春を餘所ふなし大宅小野勸修寺往行バ伏見の里ふ伏竹の雪を拂ひて十一月二日と云ふ山城の乙訓郡山崎の寶寺へ到着し斯と鑿内なせしきバ富田左近將監待受て旅の勞を慰めつ馬の四下さへ心を添末が末まで行届く歎待躰是も忍びの所爲ならめ

### ○勝家秀吉へ和平を望む事

并秀吉返答遠慮の事

羽柴筑前守秀吉へ右近衛少将み任じ京都の守護に心を盡し禁内の傍用諸公家の安堵百工町人の所置總て痒き所へ手の届く如く成しきバ上下の思ひ着と赤子の慈母を慕ふに似たり但故右大臣家一身の梶雄を頼み本能寺の淺間なる傍旅宿みて豫且の罟あかゝらせ給ふ前車の覆轍後車何ぞ戒めざらんや然し乍ら洛中に城郭を構へんとい恐れあり何處う然るべうらんと云ふ山崎の宝寺ふ玄くところに有べからむとて寶寺を城郭となし處々ふ塙を塙場通茂

呼出さん何れも那方ふ罷立と云バ近習の侍士共三間四間  
隔て退出す齋宮近々と這ひ寄て羽柴殿の氣隨の舉動風聞  
成めど存せしふ誠ふいと憐に承まざる二葉にして切され  
バ斧を用ゆとテなり其氣隨の裏りなべ遂に若君の御爲な  
らじ是を制する者柴田殿ならで誰クハ有ベキ早々軍を起  
し給ムべく瀧川なども御捕小從て上洛せん但此節北國の  
慣ひ雪深くして路悪し此雪解て路の開くを待せ給ふべし  
其間ふ筑前守へ御使節ありて何氣なき体ふ歎待給へ然あ  
らば筑前油斷仕りし中ふ矢を矧ぎ玉を鑄させ用意十脅ふ  
し際俄お切て出しひよ如何に筑前猛烈なり其狼狽騒で有  
るべウら逆然らば軍ハ勝利と成レハん能々御勘考あるべ  
くひと詞清く言上しきバ勝家はくく點頭て實もく道  
理くと同心し齋宮を厚く勞ひひ答禮の使者を進むべけ  
れ共却て謀略や洩れんずらん態と其儀に及バぬより齋宮  
心得て給しへと返答し齋宮にハ三尺二寸兼高ダ新鑄よ三  
國黒と云越前立の早馬の八すふ餘るふ貝鞍置てぞ引たり

けり此時筑前守より瀧川柴田兩人の許へ六七人忍びを入  
て置たりしふ雪ハ降り路次ハ悪きふ間道を遙々越前へ使  
者を立るハ何とぞ不審し夫ク同隸の忍び共爰彼處へ馳散  
傳へくし程ふ越前國ふ入り込し忍び共齋宮が着より  
一日二日前ふ早知りて種々ふ探りしきバ勝家方の響應よ  
りして北の庄の城中の歎待總て仔細ふ聞正し筑前守へ注  
進せしにより筑前守其忍び共へ厚く褒美を出しけり瀧川  
も柴田も斯るべしとハ夢小も知らず計り得たりと思ひし  
ハ口惜かりける次第なり勝家齋宮が口狀を能々思按し寔  
ふ然なり誰う使ふ宜らんど考へ見るふ玄蕃ハ粗暴其上ふ  
氣短うくて事を破らん是ハ前田又左衛門金森入道不破彦  
三原喜四郎ふ増者なしと思ひ定め小島若狭守中村與左衛  
門を使者として此四人を呼寄勝家對面し大息繼で下ける  
ハ筑前守が我儘ふ万事を執行ふなる若君の御爲未終ふ善  
らじと存じしは是を糺明せばやと思ひ立しが只今事を起し  
てそ若君の御爲却て災害を引出すべし因て筑前と和平を

さもなくば此方などへ浮相談を送給と云ふとやあるなど  
追従しけるを實ふもと思ふも眉睫を見得ぬ人心なれや  
益能便宜を得しと思ひつれバ夫らを北の庄ふ遣はして柴  
田の許へ音信しうバ柴田夫らを呼入れ都の事の珍しきふ  
何ごとやありつると問へバ元より柴田ヶ意を取んと思ふ  
浪人なり有つると小枝葉を添免もあり三角もありしと筑  
前守の都の執成を語りて宿老の柴田殿へ何として然様  
ふ打込られて在せしみやなど輕薄の舌を動かして唆のう  
せしかバ勝家彌々怒り速きふ軍兵を催はして打上らんと  
舞く由を瀧川闘て是の逸れり今打立て何事うなるべき北  
國の雪深し十月末より歩人だお行き難む者を甲冑して弓  
矢を取り涼えくて空しく死ん是の誰にう説せんと思案  
しけるが他人を以て云べき非走自ら往で叶之じと  
既ふ旅行の支度せしに忽ち風邪の心地しつ斯て延々なす  
ならバ勝家必定打立なん然らバ家老を使せん鶴殿召と  
て呼れしうバ何事ふうと鶴殿齋宮瀧川ダ前お踞まる瀧川

枕を揚て如何か齋宮一益ふ代りて越前に罷越柴田殿ふ對  
面し一益自身罷り越す入んど存じつるに折節風邪ふ頭痛  
み枕も頗る上らねば日數を過して詫へなし急ぎナセど某  
ダしにナ含めし一大事御近習拂ふて聞し召せと云バ柴田  
も心得て只一人身にて差寄らん其時斯云斯語れと言を分  
つゝ具ふ告れバ齋宮へ心得其座より直に出立美濃國石津  
安八大野の郡を経て越前國今立郡ふ入り乙女柏山の宿を  
過る頃鯖江より使と馳て瀧川ダ名代ふ鶴殿齋宮が參りし  
由を云せつれバ柴田方ふも警衛なして道の左右の盛砂り  
掃除せし印しうや初北庄に着しうバ旅宿を轉じ馳走して  
其後勝家對面し勝家齋宮に向ひ瀧川殿の御風氣とや如何  
なる体の心元なし委しく語り聞せまくしと云バ齋宮の進  
み寄風氣の然迄のとふいへじ十日餘を過しなば忽ち全快  
ナベし但し一益直ふ此方へ參向し御面話ゆきで叶之ぬ用  
事日數後れて詮なし齋宮を以て述る一大事ふい暫時御近  
習遠避られてとナセしうバ勝家左右を顧みて用事あれバ

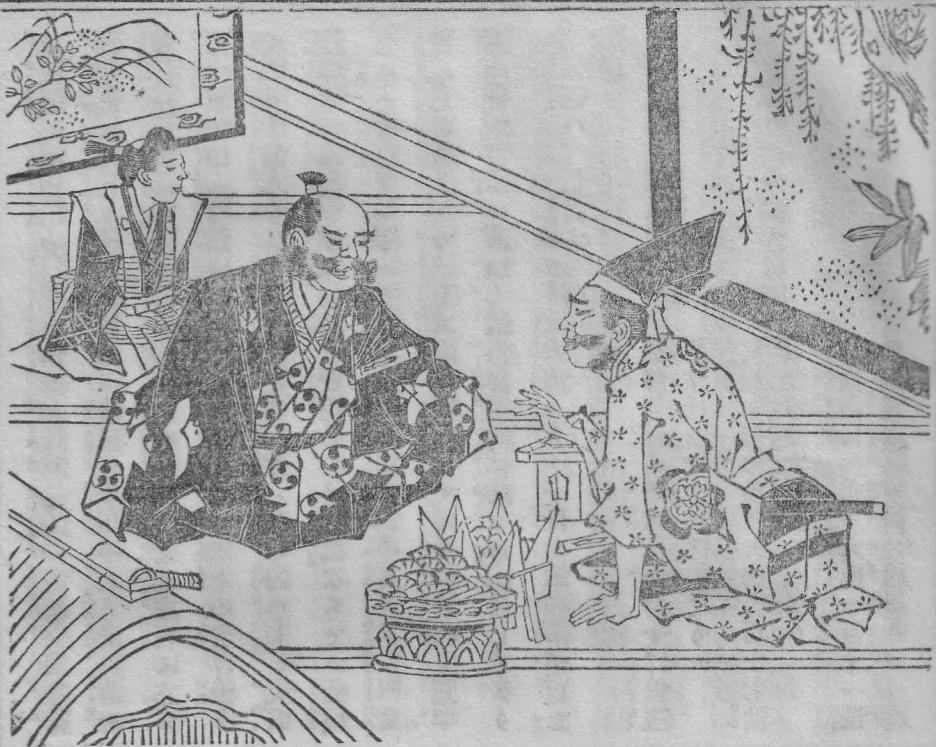
本能寺を始め阿彌陀寺杯へ總て故殿の御爲ふ些少の御追  
福をも爲給はぞ全く筑前守の大儀を行ふを嫉しと覺す所  
より事の爰ふ及びしひ自滅を需めし所なりと後ふと思ひ  
當りけり剩さへ御贈官位の御事迄都て三法師君の湯ゆし  
とハ云全く筑前守の經營なりと禁裏ふゝ聞えしかば羽柴  
少將ハ忠孝の者と歎感淺からず屢々參内すべき由を仰せ  
出されし程ふ九重の傍垣の下に暱近して天下静謐を必ぶ  
掛る武勇の臣と頼母しさ者ふ賞讃されしとなり

(第十三) 柴田瀧川内謀を定ひる事

并不破原前田金森上京の事  
天正十年の秋も過冬も早半ふ成けるに羽柴筑前守ハ主君  
の御葬式萬事整ひ京都の所置御所への御用残る所なく  
勤め半日の暇もなく明し暮し給ひけるふ北畠信雄尾州清  
洲ふ住して百万石神戸信孝濃州岐阜ふ住して五十餘万石  
瀧川左近将監ハ勢州桑名長島龜山を領し三十餘万石柴田  
修進勝家ハ越前北の庄ふ住し百餘万石の主たるハ抑々  
是誰人ゲ與へし總て右大臣殿の御恩成ぞ然るふ筑前守  
の功を嫉しと思ふ餘り君父の御遺骸を安堵し奉つること  
しも忘却して唯筑前守を失なはゞやと肺肝を碎きけるに  
何とぞや蓋し瀧川左近將監が隱謀ありて柴田と羽柴と相  
戰し之め其弊えふ乗て己が欲を逞ましくせんと思ふより  
柴田が知慮浅く驕勇なるを見て其機を圖り其祕を發しつ  
ると悟らむ終に身を亡し國を失ふふ至ること慨嘆ふ餘  
りあり都ふてハ羽柴筑前守沈香を以て總見院殿大雲院殿  
の御像を造り奉つり御送葬の儀式を整へ給へバ洛中洛外  
の浪人ハ云ふ及バ百姓町人までも夫々ふ十日の糧と賜  
りて心々ふ念佛題目などを修行しつる振鈴の聲木魚の  
響き四方ふ満々たり心なき者までも鬼の如く荒に暴給ひ  
し右大臣殿も筑前守の作善ふ因て今ハ佛に成給ふらんと  
思はぬ人も無りけり是を傳へ聞く者の中ふ筑前守惡しと  
思ふ者など無るべさ夫等ハ瀧川ダ許ふ行て筑前守ハ万  
事を一人して取行ひ給へ共信雄信孝の兩公達初ハ柴田殿

三好孫七郎の供ひ熊谷内藏允丹羽長秀の内坂井與左衛門堤玄蕃池田父子の供ひ伊木荒尾細川の家人米田菊地總押ひ筒井陽舜坊法印順慶松倉石近島左近と左右に立て武士五十餘人弓鎗砲長柄の足輕よりして末々の者に至りて八千餘人となり又大徳寺の四方六町の間へ羽柴美濃守二万餘人を引率して是を守護したれバ鳥ならで此内へ入と叶はず刻限のも成しクバ五山十刹の長老前堂西堂首座何れも今日を大事と出仕して讀經の聲高く兜率天ふ響き奇南の轟遠く紫竹高峯雲林院今宮に及しとなり世怡雲宗悅大徳寺九十一世徹岫の弟子百五鎖龕ひ怡雲大禪師掛真ひ玉冲大禪師徹岫の孫弟子大徳寺百十二世玉起龕ひ古溪大禪師笑嶺和尚の弟子大徳寺百十七世春屋大禪師

冥湯こうとう明叟大禪師世明叟宗普明叟派の祖なり  
捨骨しゃくつ仙岳大禪師徹岫の弟子百九世督宗紹董の弟笑嶺の弟子百廿二世仙岳宗洞子百廿三世竹澗宗紋  
秉炬へいこ笑嶺大禪師作法終れば三法師君を長谷川丹後守介抱し奉つり御燒香あり夫よりして秀吉長秀秀勝と次第ふ燒香し奉つり各々本座か復し次ふ秀吉七條の大佛師をして彫刻し奉つりし御木像を拜み奉つるお御面描の威嚴鐘の如き御香をや發し給ふらんと恐しき迄謹摸したり迎群參の面々佛師に物を取せたれバ山の如くお見えにけり其後總見院お石塔を造立有べしとて黃金百枚を與へられ紫竹に於て五十石の地を現米五百石を以て買得し總見院お寄附し末代迄の御回向料をなさせらる是皆筑前守一身の力を以て報行へれしなり信雄信孝兩卿何れも百万石五十万石を領し給へど



田垣金右衛門尉山内猪右衛門尉木下勘解由桑山修理小川  
 土佐守羽田長門守塙川伯耆守中川瀬兵衛是も無紋の上下  
 にて左右二行か列したり夫より四花の堀久太郎御燭立  
 ハ池田紀伊守御香爐ハ長岡與一郎御茶器ハ森武藏守御茶  
 瓶ハ細川兵部大輔入道御長刀ハ三好孫七郎木村小隼人御  
 太刀ハ池田勝入齊次御棺是ハ金紗金蘭ふて包み欄干の  
 寶珠ハ金銀瑠璃水晶瓊瑤瑪瑙の光を輝かしつる六寶形な  
 り御位牌ハ前田民部卿法印其御傍らに三法師君長谷川丹  
 後守ふ抱かれ給ふて立せらる御輿をバ池田某羽柴於次丸  
 是を昇く筑前守と丹羽五郎左衛門尉と左右ふ立て是を助  
 く御天蓋ハ山岡美濃守御傘ハ丹羽五郎三郎是を役す但幼  
 雅なれバとて江口三郎左衛門尉に添たり御沓ハ蒲生忠三  
 郎其次に京極若狭守高久六角の名代ハ青地市郎兵衛其次  
 ふ赤松次郎則之佐々木彌三郎範滿四人左右ふ立て供奉し  
 たり御臺所の御使ハ蒲生右兵衛大夫其次ふ筑前守の家人  
 加藤虎之助福島市松於次丸の供にハ仙石權兵衛大谷慶松

下人共の欣喜事大方ならぞ其後右近少將の拜賀として禁裏御所へ出仕し黃金白銀精米等夥多しく獻上しけれバ御垣の内の賑々しさ此百年ばかり例なき迄ふ謳歌したりけり夫より攝家清華大臣家羽林名家武士諸道の者に至る迄一人も漏さず金銀米錢絹綿布を贈りしかば此人ならで天下の御後見又有べからざと此を慕ひ是ふ靡くこと言語ハ天下の御後見又有べからざと此を慕ひ是ふ靡くこと言語ふ絶たり其後故右大臣殿御改葬有べしとて八月上旬斧始して紫野大德寺の内へ一寺を建立し總見院と号す九月十二日御百ヶ日の御法事を修すべし爲ふと急ぎしき共大造營なれバ合期せぞ然乍ら虚しく過すべき又非ぞ逆假殿を修理ひ洛中の諸牢人ハ云ふ及ばず上下男女押列て十日の糧を施行玄たりければ總見院殿の御爲に念佛題目心々普請成就したりしかば御改葬ハ十五日御法事ハ十一日より十七日迄と定めらる清洲岐阜を始め桑名北庄夫々へ此事を披露せしか共何れも無返事なる上御法事參詣の沙汰

もなし大德寺へ青銅一萬貫白米千石を寄捨し總見院へハ青銅七千貫白米七百石法事に付諸雜事の奉行ハ杉原七郎右衛門浅野野元兵衛なり寺内外の警固ハ黒田官兵衛荒木太太夫蜂須賀彦右衛門各々弓鎌の足輕百五十人侍士三百五十八人率ゐて是を守る諸事の差定ハ十一日轉經十二日頓寫施餓鬼十三日懺法十四日入室十五日閻羅十六日宿忌十七日同陞規式美を盡し善を盡せり近國の武士一人も残らず上京して供奉しつれ巴洛中洛外の家所關札透間もなく大德寺の大庭小幕打廻し七寶莊嚴の燈籠八角鈴瓈の銀燭左右ふ列なり床の上ふゝ蜀紅の雲錦を敷て白銀の香爐ふ黃熟の沈香焚き黄金の花瓶ふ青白の蓮華を挿たれバ上品淨土の景色思ひやられたり媚尾茂助生駒甚助一柳市助石川兵助替るべ巡行して非常を禁む高山右近大夫蜂谷出羽守ハ御先詰なれバ圓座ふ就て左右に列す御葬送の次第ハ真先へ松明二人白張を着て是を持つ次小神子田中左衛門前野勝右衛門無紋の上下着て左右に相並び次に大

いはんと云けれど勝家も道理と同心し然れば若君へ御目見えの用意すべしと俄に奔走して獻上の品々を取整へ明られば柴田瀧川打拂ふて三本木の假御所へ出仕し御前へ出けれど若君御出有て御側近く兩人を召れ祖父と上意有しきば御上段御際の下まで進みし機幾何う御側に置せられし御刀を取せられて是を執すとの御意より兩人と頂戴して御次へ退り出梅檀ハ二葉どりや生先恐しさ若殿やと舌を振ふて居たる所へ丹後守と民部卿法印立出兩人とも歸國の御暇下されしとアセしゝば柴田瀧川も御請アして退出し初社瀧川と打連鞍馬路を若狭へ掛りて歸國すべけれど其用意を爲たりける

○柴田瀧川以下諸將歸國の事

并總見院殿御送葬行列の事

柴田修理進勝家ハ僅ふ侍士五十餘人下部百二三十人みて上洛しつるとなれば本道の旅行を心根なしとや思ひけん鞍馬より貴船へ掛り丹波の國桑田郡芹生の里へ出苦狹國

遠敷郡小瀧へ掛り越前國へ忍びて引返しけるにより瀧川にも同道有べき由を勝家頻々勧めしかば一益も従者少なし江州路を伊勢國迄歸らんふ地下人共の見物して兎や角と云れんとも口惜し然ば一同にこそとて發足したりければより引續き前田又左衛門佐々内藏助金森入道不破原の面々も同じく此道を忍ひつゝ打たりけり信雄信孝の兩公達も何時迄り在京すべしと非走とて筑前守の許へ仰入られければ筑前守七々日の御法事も済ひ御百ヶ日迄ハ日數も遠くし一先御歸國へうしと御答へけるより然ばとて七月廿七日京都を御發足有て兄弟打連西近江路を長瀧ふ出て關野藤川玉村關ヶ原垂井の宿より岐阜と清洲へ引分け給ひしとなり丹羽筒井池田中川高山鹽川峰谷堀等の人々も暫時乍ら歸國し御百ヶ日に又々上京すべしとて筑前守に暇乞三法師君ふ御目見して夫々發足せしかば京都物靜みなりふけり斯て筑前守ハ諸將の引拂ひし旅宿の跡を一々見分し破損を修理し格外ふ宿料を下行しければ地

と云により瀧川も厚悪しと思ひしきバ如何様丹羽殿の仰せられし事よも穩しく聞えし柴田と某しハ年も相當にレヘバ機を見合せ勝家之心平らぎし様ア諭しげんと云により何も瀧川殿ならで柴田殿へ言ふべき人有まじと式代するを好機少して此日の集会ハ先果わけり元來瀧川ハ諸將の心を窺ふを以て主とせしに何れも柴田を蹠み筑前守を引けれバ斯てハ容易小事を起すとも鳥井の威勢お及ぶまじと思ひしバ又種々に工夫を凝しける所お勝家ハ諸將の心を聞いて猶も憤怒し此上ハ勝家一人にても秀吉ダ方へ押寄運を天に隨せて一勝負せばやと競ひ立けるを一益頻に抑止めてやけるハ柴田殿然様お思されし事理り能聞えし我等ハ織田家新參なれども筑前ヶ所置更に心お應せ走し然乍ち彼奴ハ面ふ忠義を立て下萬民を懷けし間京都の町人いやお及ばず寺社の者まで彼の猿めぐ財寶を惜まず授與ふるを悦びして是ふ心服しシヘバ我々が斯様ふやをも疾築前に告る者成べし又公家并に地下官人共

より内裏の御賄ひまで厚く心を寄て奉公したるなれば上の御首尾よく何事ふも有筑前ヶ事と能御取用ひレヘバ洛中ふて彼猿と弓箭小及びし共十に八ハ其功有まじくレ暫時堪忍いて本國へ引返し味方を牒ヒ合せ筑前守が些少ふても御幼君へ對し不忠らしき事の出來し時に夫を鳴して討掛シハ猿グ爲り一時ふ露顯しひはんク其時ハ十全十勝たるべくしと諫められければ勝家も又老練の古兵なり直ふ瀧川グナ所を會得し何様にも都みて合戦に及びてハ勝利の程覺束なく大死して笑を世ふ傳へん事も殘念なり然らば瀧川殿の仰ふ從ひ先歸國仕つるべし但猿めふ無沙汰に都を發足せんも如何なり又此方より歸國の事をや出てハ猿ふ進退を請るふ似たり是をバ何と計らひ繪ふぞと問これて瀧川ナ様某しも其事を案ヒ居てしグ三法師君御在京ふし是ハ誰が身ふ取ても主君なり主君お暇乞い事ハ尋常の事なり何の恥辱と云とクレベキ明朝三法師君の御座す三本木へ參上し御前へ出仕し其上ふて御暇をア

様に御入をバヤたるなれ箇井殿へ何と思し召れしやと尋  
ねれば順慶如何にも此間筑州の云れし所言葉小角立て聞  
えしへ共我等と筑州の初めふ三法師君の御意ひどりされ  
し間筑前守の詞かして筑前守の詞ふ非毛故殿の三法師  
君ふ付給ふて仰られし湯詞と誠み身の毛彌堅て承まはり  
しへば更ふ鎮前守の私しと思そすし瀧川殿へ筑前の言ひ  
條と聞し召しし御夫にて御聞へとと思それし林佐渡  
守佐久間右衛門尉拵を殿の御勘當跋しひし御旨を以  
て推量仕つりしへば兩公達も修理殿も筑州の云れしより  
れ今少し手剛く仰られしはんかと思それし順慶誠の弓取  
ふしとねば僻心得う能々御勘弁あるべくし筑州末へ存せ  
ぞ只今迄へ故殿の仰を背かれしと一度も是なく此度の始  
末へ勿々以て鬼神の如く存せられし然れば夫を彼是と仰  
せられいへ大功を嫌まれし所よりの惡意と思それし又如  
何に道理を付度しても一手みて切取アすべくと仰立られ  
し越後を取得給はぬハ豫誤りと存し此一條の何と仰せ分

られし哉と順慶が胸をバ寒しアし兩公達も筑前守のやさ  
れし條々に傍誤りふ相違なく然いへと是又故殿在しまし  
しハト屹度仰立ちるべくし御仕合の故殿御果なれし後  
にてひと云へバ瀧川も押返して云べき詞なく美備向て居  
たりしとバ順慶も座着忌く思はれて四方山の秋とのみ少  
眺めけり丹羽五郎左衛門尉始めより言へずして居たりけ  
るが瀧川お向ひ先刻より各々の議論誠ふ道理差極に覺え  
し但柴田羽柴木だ顯れて不平とアふも是なく大徳寺ふて  
ハ色立て見えしゝとも筑前守の説得せしムより柴田も得  
心し兩公達も其詞ふ從はせ給ひ御焼香を勧られしへバ夫  
を又取上て柴田ケ利運ふ成ベシ筋を立し共世話ふや六日  
の菖蒲かひしハ走や筑前守へ猶更のとふし依て五郎左  
衛門ケ心おへバ瀧川殿の彼是と傍配慮も詮無事成走や柴  
田ふも有筑前守ふも有最初ふ事を起しし方よそ傍幼君の  
滑爲を思はぬ不當人とアベし是ハ我々拝ダ免ふ角アハ却  
て宜しタラシ親しさ問ふて能々和解有ベシ事と思はれし

勝家を是とする人へ少く筑前守を善とする人の多さを知る故に一益の心中ふ又一計を生し諸將の退散を待て勝家と此事を讃せんとする所へ大和の筒井順慶法印入來の由を通じ順慶法印へ大和國郡山に在て有勢の大名なり今年三十四歳血氣既ふ強く思慮逞しさ上小松倉嶋の兩家老又聞えたる勇士成のみならず智謀の著なりしかば柴田瀧川ヶ廻文を見て我家織田殿の恩を蒙りて大和國に主たると雖も織田譜代の武士共と一列ふ歎待れん事へ大職冠の御影ふ對して勿体なし然して廻文を得て行ぞんば瀧川柴田ふ悪しくせらるべし天下の様未だ定まらず彼等と中違ひせんハ宜しからじ何を爲べきや思案するふ遇變して評定の果たらん頃社然るべけれど決着して折こそ諸將の退散せし頃に出来りしなれ瀧川筒井ふ向ひ陽舜御房些御連參ふて殘念ふし只今評定大形果てしなり池田中川杯の議論の清涼く退ましき事蜂谷金森の異見何れも其理至極して筒井殿の御意得如何しはんづらん御腹藏なく

御語りしへ我等が僻見を晴けやさんと云バ順慶法印袖搔合せて何事の御評定う不審少なうらぞしのみならぞ某し事へ故右大臣家の御恩ふより大和一國の主となりしへバ新参乍ら重恩を思へば故參の歴々ふも優りてしはんク然バ父とも頼みてしはし明智ふ從は走山崎の軍ふも筑前守に手を台せてしは故右大臣家の御遺跡の傍事へ三法師君御相續遊しけて筑前守御後見ナシ上織田家の御大事へ柴田殿宿老として執權たる趣きふしへば是又我等式の兎角アさん様なく其上に些少透たる所なくしへば何の了見クしべきとやに付て瀧川ナケル其事へ然もしんう此間大徳寺みて筑前守のナされし所にて修理進始め兩公達迄右大臣家へ對し不孝不忠となりしへ共餘り色も香も無きや分と思ぞれし夫ふ付修理も兩公達も筑前守を定めて恨みられしはんク上へ苦笑ひして底ふ刀を磨ぎし様みてえ傍幼君の傍爲ふ成ゆまじく此所を如何みく取扱ひして修理にも兩公達ふも少しづゝの道理を立テ度存じして社斯

内意にて筑前滅びしは、藤家又神戸殿をも北畠殿をも押倒しやべくし筑前守三法師君を立し、正嫡正統の所い議論なくしへども是迎も北畠戸の兩君達を滅しやべき内意と見えずし然ば筑前迎も織田家の忠臣とへよされどし然ども只今筑前守人の目を驚かしい程の事をなし柴田殿へ眼前ふ人ふ疎まれし行狀を致されしは、是以て勝敗に別れやべくとやせバ瀧川左近將監何れもの御物語り耳を新しく致し如何にも佐久間が強勇として禮義を知らじいを勝家宿老なり叔父甥の間なり眼前ふ是を見乍ら更ふ一言の制止を加へしと勝家の油斷とやべく勝家態と無禮を勵かせ筑前守を怒らせ其間ふ喧嘩して打果すべき計策と知れし然様かしことく思ひれしと其心中誠に恐しくし然るふ今日名々の御評論を承まひりしへば誰の心も同じ事ふし然な格ら此如してハ終ふ柴田と筑前守と弓矢ふ及べくし是い老輩の分にしへば

一應柴田へもゆて筑前と和議を取結びやべく存しハ如何とすしへば前田又左衛門佐々内蔵助如何にも一應柴田に給はりしへど云により何も然べく見えし早々其事を取繕ひ見すしん迎集會の人々宿所へ金森池田の人々よりゆてもすて見しべし筑前守の方へ金森池田の人々よりゆて

### (第十二) 藤家秀吉を討んと謀る事

#### 井瀧川一益勝家を諫る事

柴田勝家死柴秀吉心中ふ不快を懷くと雖も表ふハ柴田勝家織田家の大老として執權の大任を奉し而柴秀吉ハ幼君を補佐して京都の守護を掌り互に水魚の如し瀧川左近將監一益ハ兩雄相争之しめて鷦鷯となし其身漁父の利を得ん事を謀り先藤家お説て十分の怒を起させ次ふ諸将を集めて勝家ふ與するや筑前守ふ附やと云事を察せん爲に室御山ふ會合し池田中川高山壇川峰谷の筑前守ふ属し不破原金森前田の人々と雖も勝家ふ満ざる事を知ると雖も丹羽五郎左衛門尉ハ何れへ荷擔する所を知らず然らば

滅なせしゝ誰ダ滅なせしぞ勝家武略短かく上杉衆ふ退立  
られ己ダ身ふて己と七ヶ國の魯頤職の威勢をば落せしな  
り何條筑前守ダ落しナベキ宿老ハ宿老だけの智も有器量  
も有て社宿老なれ年の寄しと家筋の古き計りふてい無い  
足利家ふ涉例有ぞい何事を云る、ぞ寶篋院義詮公薨御有  
し刻鹿苑殿僅ふ十歳ふして傍家督と成せ給ひ勝定院  
義教公家督小立せ給ひ毛足利家に何れり他家を嗣し涉方  
の實家を嗣給ひしづや涉例有バぞい何を云れひぞや涉邊  
達ハ柴田殿の尻舞して武士の法も武邊の事も疎き故然様  
の事を云れいなり阿那聞どもなし柴田ダ主家の事をバ思  
こぞ自己の威勢を立ん事のみ思はる、拙き心ふ連給ふ面  
面してぞ居たりける所ふ金森五郎八入道熟々と閑居たり  
ケモ鳴呼武士の道にハ疎うりけりと云れて原も不破も亦  
ケモ金森殿の仰せられし所御道理ふし柴田殿ハ北畠神戸の  
ハ如何にも嫉妬の心深くして兎角山崎の間ふ合ぬ事を悔

しと思ふ所より筑前守を陥れんとせられし心無ともす  
されず洲洲にての舉動ハ柴田殿の御負と誰もノクヤてし  
なり長濱所望の事よりして總て筑前守に腹立せんと謀ら  
れし事ふて強ちに長濱の城に入用有ふも非毛筑前守の長  
濱欲しと云へバ渡し船ひ又京の旅宿を點じ難事を賄なへ  
れしと日頃中の善惡に留ま疎き親しきふよら毛平等ふせ  
られし事並々の人の及ぶとに非を然ば誰人ふても此人の  
下に屬をやと思ふ人ハいへども此人の手を放れて柴田殿  
ふ屬んと思ふ人ハ有まじくし然共筑前守迫も遂ふ織田殿  
の家の老にて果給んり其所へ知れし何れふも各々偏執の  
野心を棄て眞實に御幼君の御爲第一と心懸給へゝ爭論に  
及ひしとハ之有まじくし我等坏柴田殿の御下お居しへど  
も時として迷惑なる旗頭かなと存し時も之有し因て人  
も然思ふならんと推量仕まつりしとすせバ鹽川伯耆守何  
様金森殿の仰せられし所御道理ふし柴田殿ハ北畠神戸の  
兩君達を以て御家督小立さて筑前守を討滅ししとんとの

殿の仰られし事ふいへ共何とやら事の情分き難くいわれ  
等ハ元來筑前守と同意ふて中將殿の涉嫡王に在ませバ三  
法師殿より外ふ渉遺跡たるべき渉方なしと存じし北畠殿  
神戸殿ハ他家の渉遺跡なり何迎げ一身にて兩家の渉跡を  
嗣せ給ふべきと思ひつれバ兩公達の渉事ハ全く主君とい  
覺えやさす柴田殿の兩公達を取持すされし事却て心得難  
くい是ハ勝家の偏執にて全く以て筑前守が此度の武功と  
浮後の業共の行き届きしを嫌く思ふよりの事にてひ清洲  
ふ會合せし時の失禮大將たる人の行狀ふいをぞ其時既ふ  
武士ふハ武士の禮有ものにい然様の禮儀ハ誰人ふ渉習ひ  
いひしふやと問へかりしものを各々渉異見に付て思ひ止  
まり北國の事も勝家武略の足らざる故ふ京着延引に及  
びしなり彼を知り己を知るを以て武略の所長とす景勝  
若けれ共諸武士何れも謙信の調習せし所なれば容易に攻  
取難きを知りして軽々しく深入せしハ彼を知らざるなり  
引取際に至りても佐久間玄蕃柴田伊賀守の勇有て智無と

を知りして上杉衆ふ追慕されしハ己を知るなり然るふ  
筑前守ハ右大臣家渉事有しを聞て猶高松を攻落し高松を  
取り初めて右大臣家の渉事を露へし一戰を挑み人質を取  
て上りしと誰うへ優劣を知るべき夫等の事よりして免  
ふ角筑前を陥いれんと計られし意の底の腹黒を誰うへ善  
とアベキ方との渉異見如何と大音に云れしかば不破彦三  
原彦次郎兩人詞を揃へてやけるハ柴田殿の仰渉道理ふい  
へども勝家北國を引取り際の事ハ據處なき次第にい勝家  
武略の足らざるのみ成る時の選ふよりし所と知べくい渉  
家督の評定どても三法師君餘りふ渉幼年故信雄信孝兩君  
達を以てとすされしなり足利家ふ渉例も有バと存せられ  
し成べし然るに筑前守の云れし所にてハ勝家の宿老たる  
權も無反七ヶ國總管領の威勢もなくなりやすべくい然ひ  
てハ故殿の渉定も自然と崩れしこんと歎うへしく存しな  
りとすも果ぬふ蜂屋中川の兩人少しも耐えず原不破の二  
人ハ何を云るゝや故殿の渉定有し七ヶ國總管領の威勢を

衆を呼集めて其心中を察せべし但し柴田殿の旅宿も我ら  
が旅宿も皆是筑前みなこぢらせん差當し所なれば如何に用心する共事  
ハ漏易さるものなり何所に會合すべしと云バ柴田暫時案

ヒ湯室こそ然るべけれ山高々らぞして地廣く四方打ひら  
きて隠れ聞べき蔭もなしと云ふより然ば都の名残を惜む  
爲とて湯室の山へ集會すべき由をや合せてけり是瀧川ダ  
方寸より出て勝家と筑前守とに軍させ双方牛角の戰ひな  
らば互に傷くべし万一又一方勝たらバ勝たる方によりて  
自分の運を試みんとの謀計とぞ聞えける

### ○瀧川奸計諸將會合の事

井諸將兩雄の心腹を論ぜる事

柴田瀧川の廻文ふより何事どい知ねども右大臣家湯遺跡  
の儀に付て内々や談ざる子仔有との趣き故何れも時刻違  
へ走湯室の山ふ會合したり夫ハ誰々と云に先一番丹羽五  
郎左衛門二番ふ池田勝入齋父子三番に中川瀧兵衛四番ふ  
高山右近大夫五番ふ塙川伯耆守六番に蜂谷出羽守七番に

堀久太郎八番に前田又左衛門九番ふ不破彦三十番に原彦  
四郎十一番ふ金森五郎八入道十二番に佐々内藏助等一人  
も漏也集會せり但し柴田ハ物蔭か隠れて出會せど今日俄  
ふ腹痛して座か堪ねバ面々の意趣を一通お認めて見せ給  
へど一益是を乍傳へ次ふ一無下けるハ昨日ハ右大臣家  
七々の湯法事ふ參詣し湯焼香仕つりつれバ最早湯百ヶ日  
までハ湯法事も敷ふまじ然すれバ面々湯歸國有へし國  
を隔離を越容易ふ湯出會も成まじきなり夫ふ付何も幼君  
の湯爲に忠義を盡さるべき湯心中少も疑ふべきふ有ねど  
も筑前守グヤせし所ふ從ひ給ふ勝家グヤせし所の信雄  
信孝兩公達の湯事何れを以て道理と思ざる、ふや各々の  
湯質慮承そりたしと云バ諸將何れも鳴を鎮めて音もせざ  
左右前後と互に押譲りて扣えたり丹羽五郎左衛門尉長秀  
ハ老臣の列と云ひ舊家なれば一番ふ發言有べきふ眼を閉  
て默然たり是ハ柴田グ我意強きを惡むを以て兎角の沙汰  
に及バ走池田勝入齋の性質急迫の人なれば進み出て瀧川

の推舉せし中間立の木下藤吉郎今へ中國の探題職播磨美  
作備前備中丹波山城の内二郡の領主羽柴筑前守其羽柴の  
柴の字ハ柴田殿の一字なり夫ダ那程ふ口賢く留りし事無  
念とも口惜とも云計り無けれ共山崎坂本の軍功ハ云ふ及  
バ忠光秀利三と日岡に晒して故殿の傍憤はりを休め傍初  
月忌の施行本能寺の警衛七々の傍退福大徳寺への納物衆  
僧の布施渉贈官位の禮式扱へ我々ダ旅宿の賄ひ都て筑前  
守グ爲し所なれバ織田累代の大老たる柴田殿も手連れ  
爲給ふものウラ筑前と争ふべき詞なし如何ふして腹をバ  
慰んど思すやど問はれて勝家大息繼如何ふも左近殿の云  
るゝ通り都て筑前めふ仕負たれバ都みて爲べき様なし  
因て本國へ引返し能く軍勢を練習て筑前を打滅し昨日今  
日の無念を晴けんと思ひ旅宿を引拂ひテべく存る所なり  
と云バ左近聞て無名の軍ハ勝利なし今程猿めダ爲所織田  
家の再興を以て名とすれば何れへ向ても猿めハ忠臣ふし  
て節義高し我々ハ主君の弔ひ合戦を外したるのみ成主

君の仰を請て罷り向ひし關東を棄て一揆輩に追駆られ見  
苦しき体ふて逃上り柴田殿ふも上杉ふ退はれ給ひしと  
人を知る然るふ猿めハ高松を攻落し毛利の人質を捕加罪  
まで召連し次第我等と日を同しく玄て語るべき非必然  
バ我等をバ腰抜武士と世の物笑ひにせられつらん如何に  
口惜とも無念とも云瀧川杯の力づくふて勝べき筑前なら  
ず柴田殿然い思さずや由無那様の者と軍して負たらば身  
の破滅何れふも時節を待給へと云バ勝家彌々怒り瀧川殿  
ハ然様ふ筑前を恐れ給へと某しハ筑前怖と思ひ老乞々猿  
と一合戦し切てく切り散し叶ひぞハ此身を捨るのみ何  
時迄猿めダ醜そび者と成べきやと牙を咬を見て瀧川ハ柴  
田ふ十分怒らせたり是ふてハ一定筑前守と弓箭ふ及ぶべ  
し但此序ふ筑前ふ與力する衆ハ誰々成や夫を見つべしと  
思ひしクバ勝家に進めてゆけるハ然程ふ思召バ先廻文を  
以て諸将を招き筑前守ふや與する我々と同意するや否や  
と云を計り給へと云それで勝家實ふ道理なり然ば諸大將

を治め天下を安んずるふ足らんや然あらば此君達二人乍  
ら筑前守と鋒先を争ふべくもなし丹羽五郎左衛門へ如何  
なる所存にや筑前守と入魂なり柴田勝家一人筑前守と往  
年より中悪きグ山崎より以來の事により彌々中悪くなり  
しと思ふれたり其上ふ大徳寺にての始末勝家嘸クし怒り  
しならめ此人と筑前守と弓箭ふ及ばん時前田佐々等ハ勝  
家と同心すべし中川壇川池田等ハ筑前守に就べし然して  
其戦ひ殆々龍虎の勢ひ成べけれバ双方傷ひて倒るべし其  
倒るゝ機会臨んで信孝朝臣を奉じて我天下を定むべきな  
りと心中に計策を定めまづ何心なき体して勝家グ旅宿を  
訪ひけり勝家へ大徳寺にて筑前守と争論ふ及びし所筑前  
守グ伏兵ふ驚かされ怒氣満面ふ顯れ胸中熾るグ如く思へ  
共總て筑前守お先を取れしきバ凄々として寺内を退出し  
旅宿ふ歸りつるに旅宿と云共筑前守が差配せし所なり一  
飲一飯も筑前守が執行ム所なれバ何事も心置れ口惜しく  
腹立しさみ速くに旅宿を引拂ひ勝家グ心の儘なる所に一

日二日も逗留し心静クに右大臣家の湯腹召れし本能寺を  
も拜み然して後歸國せんやと思ひつる儘然るべき在家并  
ふ寺院杯を借んど家來を遣そし語そせけるお何處もく  
筑前守ヶ郎等下部杯の宿となりて一尺の地だに透間なし  
然ば今日出立んと思ひ切て故殿の湯餘波なり本能寺へと  
志さし先家來を以て頼て勝家參詣仕つるべしと云せしむ  
寺内をバ筑前守の人數を以て嚴重お警衛し本堂の邊りあ  
ハ幕打廻し容易他人の立入るべき様無れバ警固の者ふ斯  
ど言入れ玄ウバ我等式の心ふて何と答の成べきぞ筑前守  
ふすて後鬼も角もナベし暫時待給へと云しきバ勝家に今  
一應ナテ後と云て立歸りつる由と云ふより勝家跳り上り  
く口惜ダれど詮方なし如何せん筑前守と一軍せバやと  
思へばも侍士僅四五十五人具したる迄の事なれば筑前守  
五六万もや有んと思ふ勢ふ掛台べくもなし噴越前へ歸り  
て後と定めし所へ瀧川來りしきバ呼入れて對面しけるふ

瀧川ヤ様筑前守ダ昨日の舉動をバ何とく思す元ハ柴田殿

(第十一) 潢川一益龍虎の計策を企つる事

并一益勝家を謀る事

滢川左近將監一益の織田家累代の家臣ふも非毛元來江州甲賀の侍士なりしダ其身の才覺を以て右大臣家ふ重く用ひられ關東管領職として上州廻橋ふ在城し北條家を蠹工夫區々なる所へ右大臣家汚生害有つる由森野藏より注進有しかば此へ抑も如何なる世の赴行かやと中流に棹を失ひつる意して曹時へ呆れて居たりけるが日々ふ其沙汰世上ふ傳ひれば鉢形の北條安房守廻橋へ寄る坏風聞頻なり此時一益惟らく右大臣殿汚生害と聞て信州甲州の味方ち氣力を失ひしのみ成せ一揆蜂起して勝藏ハ上方へ逃上る河尻ハ國人の爲ふ身を果しつるとかや然らバ豫て思ひしこへ成べくも非毛其上ふ我只一人何として此所を持耐ゆべれ毛や免にも角み廻橋を棄上方へ上り伊勢伊賀の

中にて働くべし但此儘此所を立退バ鉢形より付舉をぬとハよも有じ然バ北條を欺計て易々と碓氷を越セヤど思案し信社使者を立て安房守を欺さしに安房守年若く思慮深ければ古兵士の一益に謀られしなり一益清洲ふ馳付し時ハ織田殿遺跡の評定済つる跡なりしかども一益密ふ思ふ様三法師君ハ正しく汚世子中將殿の汚嫡子ふ在せども僅に安堵させ奉つり汚遺骸を埋葬し汚初月忌を修し七々の傍法事よりして汚贈官位の儀總て織田殿汚一族衆の思ひを寄せる所悉皆く筑前守に奪されづれバ何事ふ付ても筑前守と争ひ難き所有況て正嫡正統の三法師君を傳かしづかれたれバ自然と筑前守幼君補佐の任に當る勝家大老臣ハ短勇おして智慮足らず是又人思ひ付所なし如何予國

眞書太閤記第八編中卷目錄

(第十一) 滾川兩虎相爭ふ計策の事

并一益勝家を討る事

並益軒計の事

(第十二) 並諸將會合の事

勝家秀吉を討んと謀る事

柴田秀吉を謀る事

(第十三) 滾川柴田内謀を定る事

柴田濱川以下諸將歸國の事

并信長公葬式行列の事

濱川柴田内謀を定る事

(第十四) 前田利家時運を考ふる事

并長九郎左衛門尉諫言の事

并長谷部信連の事

(第十五) 隠白浦右衛門由緒の事

并長九郎左衛門尉枕膳祝儀の事

大谷慶松長瀬へ来る事

并神谷柴田伊賀守を謀る事

(第十六) 柴田伊賀守秀吉と一味の事

并信孝籠城三臣忠諫の事

并秀吉濃州表進發の事

(第十七) 柴田濱川出張延引の事

并信孝僞りて和平を望む事

秀吉濃州歸陣の事

并佐久間玄蕃柴田伊賀守を謀る事

信孝北國へ牒合せ籠城の事

并美濃守秀長岐阜を圍む事

并信孝柴田の援兵を望む事

(第十九) 柴田勝家軍勢催促の事

并前田父子密意を残し出陣の事

并北國勢會合進發の事

秀吉勢州表進發の事

(第二十) 并龜山洛滝濱川勢戰死の事

并小旗不思議の謀計の事

并峯の城一封の書翰退去の事

眞書太閤記第八編中卷目錄終

